

後産排出後の處置

め、或は未だ剝離せざる後産片を遺し、後出血或は産褥熱等を發する等の危険あるが故に、其の時期を誤らざるやう注意せざるべからず。

此等の方法を行ふも、胎盤尙娩出せずして既に胎兒娩出後、二時間以上を経過する時は、速に醫治を乞ふべし。決して自ら臍帯を牽引し、或は手指を子宮腔に挿入して之を掴み出すが如きことを爲すべからず。

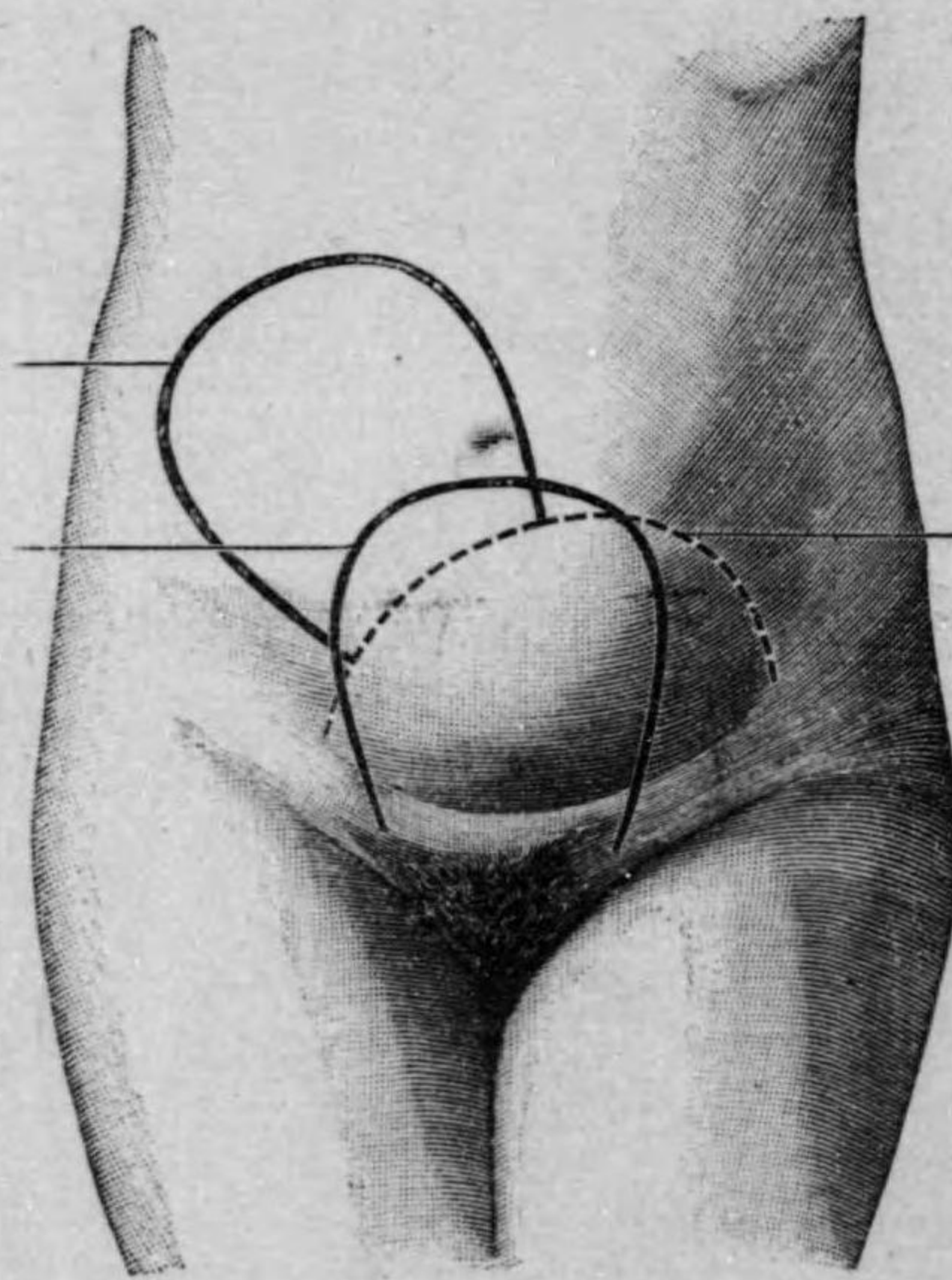
**三 後産排出後の處置** 後産排出すれば、直に手を腹上に貼して子宮收縮の状態を検し、次で陰部に裂傷あるや否やを検せざるべからず。即ち産婦を仰臥せしめ、膝部を屈曲して兩脚を開き、殺菌せる一手の拇指及び示指を以て陰唇を開き之を検査すべし。若し一仙迷以上の會陰破裂あれば、速に醫師に縫合を乞ふべし。又陰部検査の際、空氣陰門より進入し危険なる症狀を來すことあれば注意すべし。

其他此の検査時に於ては、腔内より多量の出血なきや否やを検するを要す。若し子宮硬く收縮せるに拘はらず、著しく出血する時は、産道の損傷によるものと知るべし。此の際に於ても亦速かに醫師に托するは言を俟

子宮輪狀摩

たす。以上の検査終れば、一手を以て子宮に輪狀摩を施し、數回之を反

圖 二 十 六 百

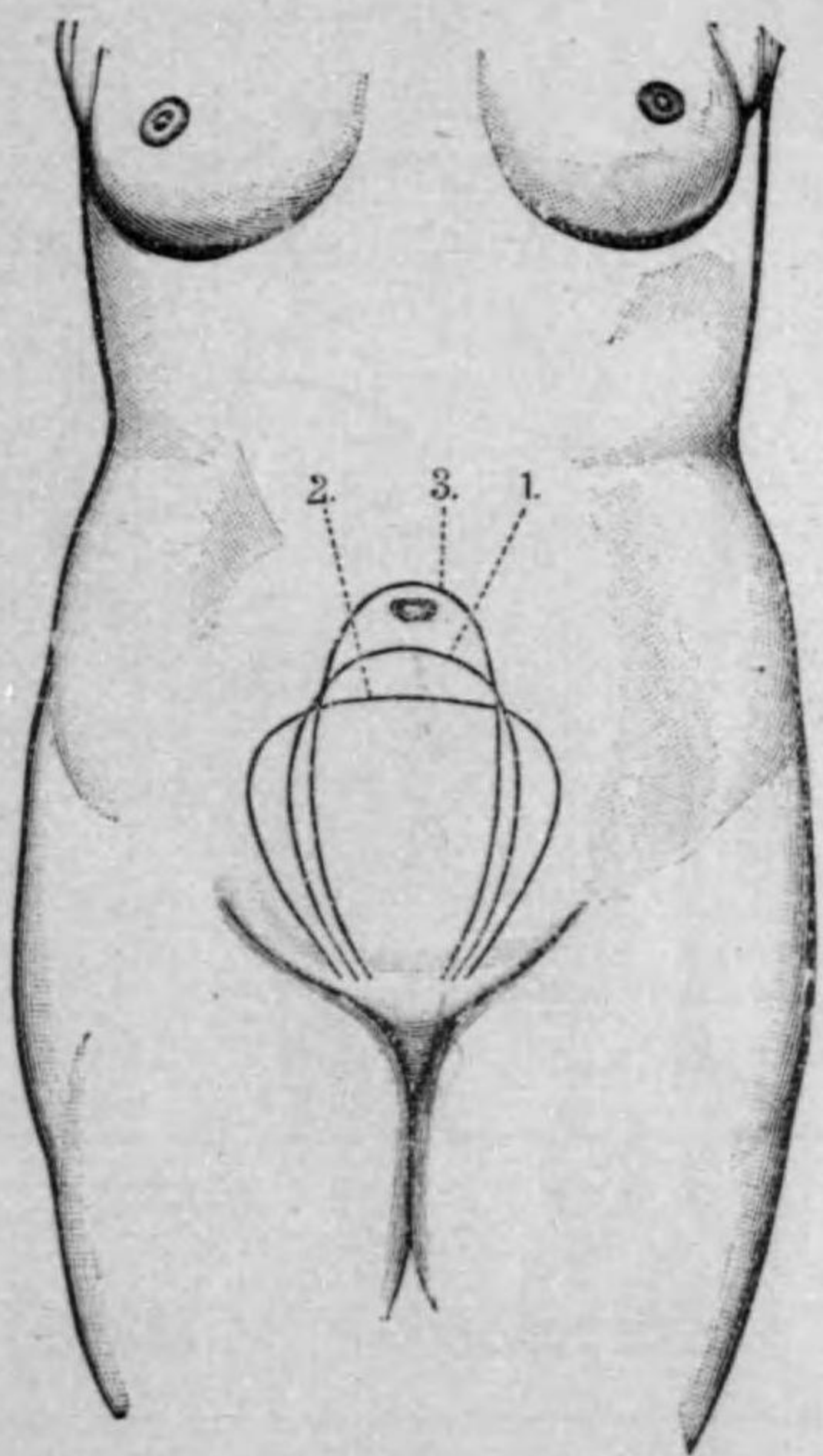


す示を性動移の宮子るけに日初褥産

て叮嚀に之を検し、胎盤卵膜共に缺損なきを確認する時は、豫じめ準備せる胎盤容器(民間販賣する所の胎盤容器に)に納め、醫の來診ある場合に於ては、

必ず之れを保存し、之が検査を受くべし。後産の検査終れば、温かき百倍のリゾホルム水中に浸せるガーゼ、又は脱脂綿を以て外陰部及び其の周圍を軟に拭除し、次に助産婦は成るべく産婦を動かさずして、手捷く汚損

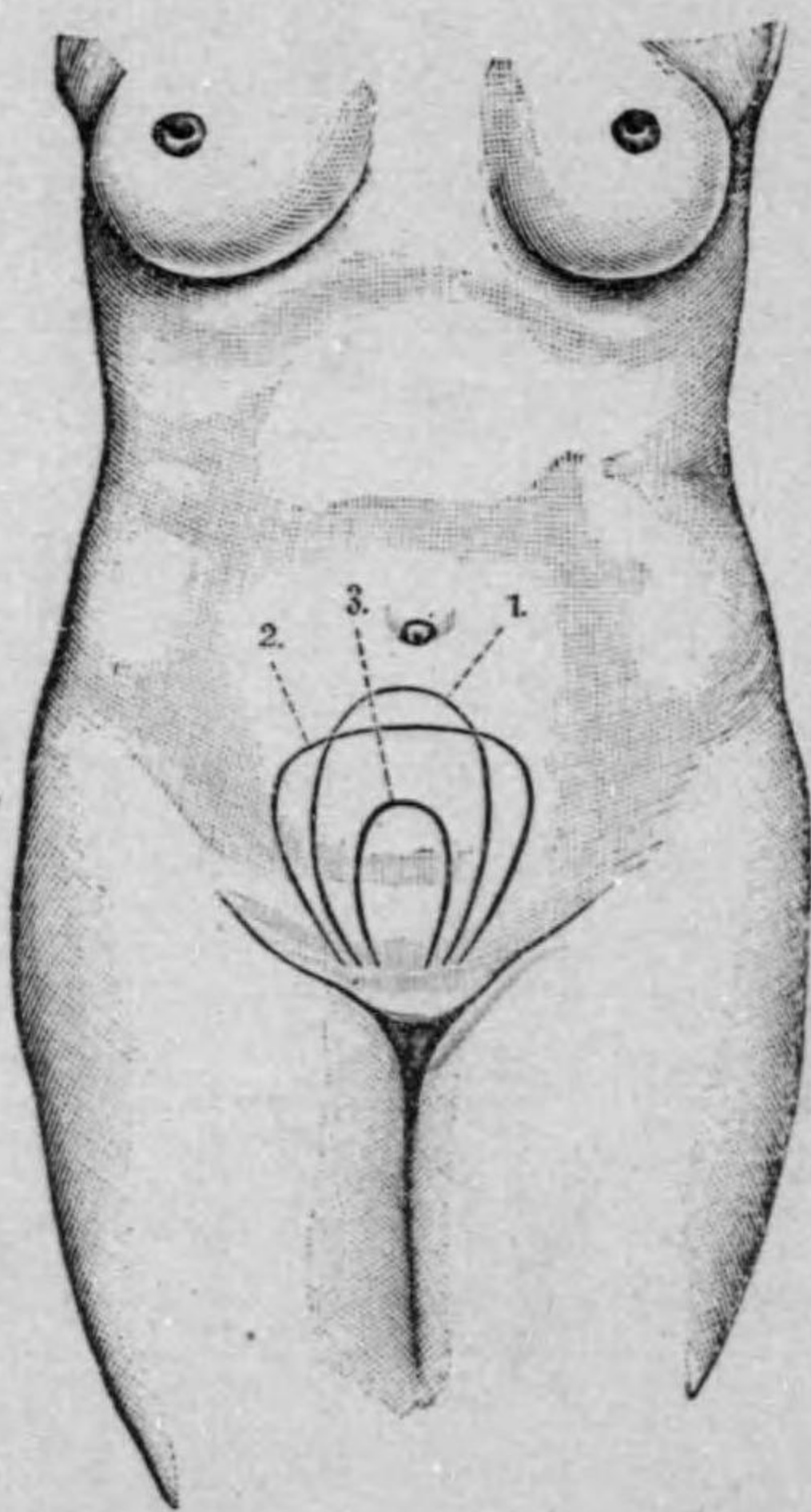
圖三十六百第 産褥に於ける子宮の形状の變化



- 一 胎兒分娩後に於ける卵圓形子宮
- 二 後産剝離間に於ける短廣子宮
- 三 後産娩出に於ける狭長子宮

せる敷物を悉く除き、準備せる敷布と交換し、臀下には清潔なる折り重ねたる布片、若しくは前章述べたる方形の蒲團を敷き清潔なる壓抵布を外陰部に貼し、丁字繻帶を施して之を固定し、次で腹壁に腹帶を施すを要す。

圖四十六百第



- 一 分泌蓄留に由り擴大したる子宮
- 二 子宮筋の收縮を起し後陣痛の始りたる子宮
- 三 分泌物排泄後に於ける狭小子宮

換ふるをよしとす。又産褥床の設ある時は、腹帶を施せる後、靜に褥婦を移すべし。但し壓抵布とは幅三寸長さ七寸の長方形に切りたる脱脂綿をガーゼにて包みたるものなり。

腹帯と其の方法

腔内洗滌の注意

**緒方式腹帯** は、腹壁の弛緩を防ぎ、子宮の收縮を催進するの益あるものにして、其の法先づ腹壁殊に子宮上に、綿花四五枚を折り重ねて之を貼し、別に長さ三尺餘の布片を取り、其の一枚のものを、中央凡そ一尺餘を残して両端を各々四片に裂き、之を外方に、他の一枚を内方に折り重ね、褥婦の背部より廻して、其の内方のものを腹壁に貼せる綿花上に於て左右相合せしめ、其の上を裂きたる布片を以て各々結合すべし。

**腔内の洗滌** は、正規分娩に於ては之を要せず。若し必要の場合には、醫の命令を請ふべし。但し外陰部を清潔にすべし。其の他會陰の裂傷ありて、其の縫合を要せざる時は、一布仙のリゾホルムに浸したるガアゼを外陰部に貼し、其の上に乾燥せる綿花を抵て兩脚を閉ぢて臥せしむべし。然る時は自然に癒合するものなるが故に、決して無用の薬を貼布すべからず。又腔口、前庭等に小なる裂傷ありて、之より稍々多量の出血を見ることあり。此の如き際に於ても、尙會陰の小裂傷に於けるが如き處置をなし、外陰部の壓抵は殊に固からしむべし。然る時は自然に止血し、損傷も亦治

産婦の嗜眠

癒するに至るべし。而して此等の裂傷若くは損傷なき場合は、褥婦を仰臥せしめて、兩脚を伸展せしむるを良とす。

以上の處置終らば、新生兒を沐浴せしめ、後再び子宮收縮の状態、並に出血の有無を検査すべし。又褥婦は此の際多く眠を催すものなるを以て、妄りに妨ぐべからず。若し飲食物を欲する時は、薄き茶、糜粥、ソップ及び其の他の流動性食物を温め適宜に之を與ふべし。而して助産婦は褥婦及び小兒を悉く處置し終りて、二三時間は褥婦の傍にありて、母兒兩體に注意せざるべからず。又歸宅せんとする際には、更に子宮の状況、出血の有無、膀胱の緊満せざるや否や等を検し、若し膀胱緊満せる時は、仰臥のまゝ股間に便器を挿入して排尿せしむ。然れども自然に排尿し能はざる時は、嚴重に消毒せるカテーテルを以て之を排泄せしむるを要す。生兒に就ても、亦臍帯の斷端を検し、出血なきや、或は結紮絲の緩み居らざるや等を精査せざるべからず。又呼吸の状態に注意し、母兒兩體に危険なきを確認して後歸宅すべきものとす。

### 第十三章 雙胎分娩の経過及び其の取扱法

#### 雙胎分娩

に於ては、始より醫師に托するを要す。助産婦の取扱法としては、正規分娩と異なることなし。只一兒娩出後に於て、最も精密なる注意を要するのみ。

#### 雙胎の分娩

は、單胎よりも一二週間早く發するを常とす。而して其の小兒は發育不良の爲死すること多し。母體にありては、子宮の過度なる膨大のため、屢々陣痛微弱を起すことあり。又第二兒に於て骨盤端位等の不良なる位置を取ること多し。

#### 分娩の経過

は、第一兒産出迄は正規のものと同じ。一兒娩出するも、子宮收縮せずして、尙一兒を残し、暫時を経て第二兒の胎胞を形成す。而して第二兒、若し正規位置を取れる時は、其の分娩は第一兒よりも容易なるものとす。胎盤は第二兒娩出後共通の一箇として出で、又二箇として同時に出づるを常とすれども、稀には各胎兒に伴うて別々に産出することあり。

雙胎分娩の  
處置

あり。兩兒分娩の間は通常十五分乃至三十分なるも、時としては半日或は一晝夜を要することあり。又第一兒娩出後、數週若くは數月間を隔て、第二兒を産出することあれども、頗る稀有の事なり。

#### 雙胎分娩の處置

としては、勿論醫に任すべしと雖、助産婦は之を補助せざるべからず。即ち第一兒娩出して、臍帶を結紮せんとするに至れば、最も注意して第二結紮を施さん事を要す。若し之を忽にする時は、第二兒をして多量の血液を失はしむべし。次で第二兒を娩出すべき陣痛發作すれば、尙第一兒に於けるが如く之を處置す。此の際注意して心音を聴取すべし。是時として胎盤早期剝離のため、第二兒を危険ならしむることあればなり。又兩兒兩性にして、良く似たる時は、分娩後に何れの小兒を先に娩出したるやを見別け難きことあれば、助産婦は始めに産出せる小兒に記しをつけ置くべし。而して雙胎の小兒は一般に發育不良なるが故に、之を溫暖に保たざれば死亡し易し。

三胎以上の分娩に於ても、雙胎に於けると同様の處置をなせば可なり。

兩兒兩性の  
ものは先後の  
別を要す

### 第五編 正規産褥の経過及び其の取扱法

#### 第一章 正規産褥

産褥の時期

褥婦

産褥とは、全く分娩の終りたる時より、妊娠の爲に變化せる生殖器及び全身状態などの、悉く恢復するの間に於て、凡そ六週乃至八週日を要す。而して産褥中の婦人を褥婦と云ふ。授乳せざる者に於ては、産褥の終りに至れば再び月經を來すことあれど、授乳せる婦人は、分娩後凡そ九箇月を経ざれば來潮せざるものなり。斯の如く産褥期に在りては、褥婦全身の諸器は漸々常態に復すれども、乳房のみは更に増大し、乳汁を分泌するに至る者なり。

#### 第二章 生殖器の復故機能

復古機能

増大せる子宮及び其の他の部分、産褥中漸々舊に復するの機能を稱して復故機能と云ふ。

#### 第一 子宮の縮小

子宮の縮小  
と後陣痛

子宮の縮小 するは、妊娠中に増殖せる筋組織が崩潰して、其の容積を減少すると、後陣痛と稱する子宮の收縮とに基くものなり。

後陣痛 とは、分娩後に發する弱き子宮の收縮にして、恰も分娩時の陣痛に於けるが如く、子宮の時々硬くなりて疼痛を伴ふを云ふ。時を経るに従うて次第に微弱となり、遂に産後二三日にして消滅し、久しきも五日以上に亘ることなし。後陣痛の強弱は分娩時間の長短に關係するものにして、其の長きものは弱く、短きものは強し、故に初産婦は甚だ微弱にして、時としては全く感ぜざるものあり。之に反し經産婦は強く、往々其の安眠を妨ぐるに至ることあり。

其の他凝血、胎盤片等の子宮内に遺存するときは、強劇なる疼痛を起すを以て注意せざるべからず。(後陣痛の條を参照すべし) 又後陣痛は乳房の刺戟により促進せらるゝが故に、褥婦自ら嬰兒に乳を授くる時は、屢々其の

発作を來し、速に子宮を縮小せしむるの効ありとす。

### 子宮の状態

子宮は分娩後著しく収縮して硬固となり、手掌を以て容易に之を把握し得べく、其の底部は、殆んど臍下に達す。經産婦は初産婦に比し常に少し高く位すべし。然れども分娩後約十二時間を経て、膀胱充滿する時、子宮は押し上げられ、膀胱の底部臍の高さに達し初學者は之を子宮底と誤認することあり。之を假性の増大と云ふ。直腸の充滿せる時も、亦略ぼ同一の状を呈す。若し膀胱、直腸共に空虚なるに係はらず、此の如き變状を起す時は、子宮腔内に出血せるものにして、甚だ危険の徴候なり。而して子宮底は分娩後等二日、若くは第三日より漸次に下降し、第四日に至れば分娩直後と同一の高さを示し、第五日には臍と恥骨縫際との中央にあり。第八乃至第十日に及べば、恥骨縫際の後方に入り、第十二日に至れば、全く小骨盤中に降り、第六週日を経れば、子宮は全く舊形に復す。而して産褥子宮は既に一定の收縮を營みて、常態に復するの後に雖、未だ一回も妊娠せざる婦人の子宮に比すれば、大約一仙迷長きものなり。

### 子宮内面

殊に胎盤の剝離面は、分娩後無数の血管斷裂口あれども、後陣痛の發作と、凝血の生ずるとによりて、全く閉塞し止血するに至るものなり。

### 子宮頸管

は、分娩直後に於ては、尙ほ自由に手指を通過するも、三四日を経れば僅に一指を通すべく、第八日の後、子宮内口は全く閉鎖して、一小指だに挿入すること能はざるに至る。

### 子宮腔部

分娩直後に於て、子宮口縁は二箇の弛緩せる片狀をなして腔内に下垂し、殆んど子宮腔部を區別し難しと雖、十日を経過すれば明瞭に之を認め得べし。然れども尙其の形大にして短かく、數回の小裂痕を有し、凹凸不平を現はす。且つ子宮外口は横裂狀を呈し少々哆開せり。是等は分娩の爲に生じたる變化にして、生涯消滅せざるものなり。

## 第二 腔の状態

### 陰管

は、漸次縮小すれども、全く復舊せずして、分娩前に比すれば

分娩の爲に  
生ぜし腔部  
の變化

卓  
ミルチ状肉

頗る廣く、其の壁も皺壁を失ひ、平滑となる。腔入口に於ては、分娩の際、夥多の裂傷を生じ、且つ處女膜の附着部も亦断裂せらるゝが故に、治癒の後處女膜は結節狀小隆起をなして遺残す。之をミルチ状肉卓と云ふ、其の他の稍々大なる裂傷は、線狀をなせる白色の瘢痕を止むるものなり。

### 第三 惡露の排洩

血性惡露  
漿液性惡露

既に述べたるが如く、子宮の内面は後産の剝離せるが爲め、普く創面を呈し、殊に胎盤の剝離せる部に著るしく、此等の創面より一種の分泌物を排洩す。之を惡露と云ふ。惡露は初め二日間は、脱落膜の小片を有せる純粹の血液にして、腔粘液を混するが故に、稍々粘稠なり。之を血性惡露と云ふ。第三日目に至れば、其の質稀薄となり、血液亦減少して淡赤色を呈し、恰も水中に血液を混じたるが如く、且つ一種甘性の臭氣を帶ぶ、之を漿液性惡露と稱し、第八日目まで持續す。その全量各人によりて異なれども、八日間に於ける全量は約一〇〇〇乃至一五〇〇瓦なり。第九日以後に

白色惡露

達すれば、更に變じて帶黄白色をなし、其の質再び粘稠となる。之を白色惡露と云ふ。惡露は退色するに従ひ、其の量も共に減じ、第三週以後に至れば、其の減少著るしく、凡そ第五週に於て全く盡くるものなり。惡露の分泌止む時は、子宮内面の創傷も全く治癒したるものとす。而して授乳者は授乳せざる者より一般に其の量少なし。

### 惡露

は、通常子宮腔内にありては、毒性を有せざるも、一旦腔外に排洩せらるゝ時は、此の内に存在せる無数の細菌を混じて傳染毒を帶ぶるに至る。故に此の惡露の創面に附着する時は化膿す。然れども通常腔内に存在する細菌は概して無害のものなるを以て、褥婦の生殖器に存せる多數の創傷に附着するも危険なる疾病を來すことなし。今若し助産婦にして、不潔なる取扱法を爲し、有害なる細菌腔内に侵入して惡露に混じたりとせんか、忽ち創面より吸收せられて、危険なる産褥熱の症狀を呈するに至る、助産婦の責任亦大ならずや。

惡露と産褥熱との關係

### 第三章 乳汁の分泌

初乳  
乳房發育と  
状況

**乳房の變化** 乳房は妊娠中既に増大し、其の末期に於て之を壓する時は、水様の薄き乳汁、即ち初乳を分泌す。されど其の乳房發育は未だ完全ならず。産褥期に至り始めて充分なる發育を成すものなり。而して分娩後第二日、又は第三日に於て著るしく腫脹し、皮膚は緊満して皮下靜脈を現はし感覺頗る過敏となり。張り斷るが如く。また刺すが如き疼痛を發し、時としては其の痛み腋窩、肩胛、上膊等に及び、或は上肢を運動する能はざることあり。此の際三十八度以内の微熱を發すれども、決して之より以上の高熱を現すことなし。若し其の熱三十八度を超ゆる時は、必ず他に異常あるものと認めざる可からず。而して此等の状況は、一日乃至二日間持續し、乳汁の排泄増進するに至れば、漸々腫脹減退し、疼痛も亦治するを常とす。

### 乳汁の分泌

飲料と乳汁  
の關係

となる。蓋し褥婦自ら乳を授け、且つ小兒之を哺すること強き時は、從うて乳汁の分泌愈々速にして、其の量益々多きものなり。之に反し、褥婦若し授乳せざる時は、暫時の間乳汁自ら流出すれども、泌乳の刺戟を缺くが故に、分泌作用全く止み、乳房も亦漸次に縮小するに至るべし。又褥婦多量の液體を飲用する時は、乳汁の分泌増多するものなり。

初乳小體

**初乳** は、既に妊娠末期より其の分泌を始め、凡そ産褥の第四日迄持續するものにして、其の性半透明にして、粘液狀を帯び、黄色の點狀、若くは線狀物を混す、之を初乳小體と云ふ。而して初乳は、稍々下痢せしむるの作用あるを以て、初生兒之を飲めば、胎糞を排泄するの効を有す。然るを俗人往々空腹の爲、乳汁を求むる初生兒に、各種の名稱を附したる下劑を飲用せしむるの舊習を固守す。初乳既に此の如き天然の卓効を備ふるに、何ぞ不完全なる人工の下劑を用ふるの必要あらんや。

初乳の卓効

**人乳** は、分娩後、凡そ五日の頃より分泌するものにして、滋養分に富み、帶黄白色を呈し、不透明なり。又初乳小體を消失して之を認めず、



乳汁の白色を呈するは、其の内に乳球を混するが爲にして、即ち乳球とは脂肪より成る小球なり。顕微鏡を以て検するに非ざれば、之を見る能はず。

乳汁分泌の持続

乳汁の分泌は、九乃至十箇月間持続すれば、著しく減少し、漸次に止むを常とす。故に哺乳期限は、小兒の初めて齒を發する頃、即ち分娩後、凡そ九箇月迄とす。然れども往々哺乳を停止せざるが爲、其の刺戟によりて、二年若くは三年の久しきを経るも尙分泌するものあり。此の如き乳汁は頗る稀薄にして、滋養分に乏しく、之を飲用せしむるも、小兒に益なきのみならず。却て母兒兩體に害あるものとす。

乳汁の變性

乳汁は種々の事情によりて、左の如き變質を來すことあり。

一 強き精神の感動

ある時は其の量を減じ、或は性質不良となることあり。

二 母體の疾病

即ち脚氣、梅毒等の病毒は、乳汁中に移り行くものなり。又高き熱を發する時は、乳汁の性質頗る不良となる。

乳汁分泌の害

乳汁分泌と其の變質

三 乳房に疾患

ある時は、乳汁中膿を混する事あり。

四 多くの藥品

は、能く乳汁中に分泌せらる。例之は、母體に下劑を與ふれば、小兒も又下痢し、梅毒の藥を與ふれば、小兒にも効を呈するが如き之なり。

五 食物中の成分

も亦乳汁中に進入し、屢々其の性質を變化するものなり。

第四章 褥婦全身の變化

分娩直後に於ける褥婦

は、概ね惡寒を覺ゆるも、暫時にして溫暖となり、發汗を來し、大に爽快を感じ、以て疲勞の爲睡眠を催すべし。而して十二時間以内に於ては、三十八度以下の微熱を發し、更に十二時間を經過すれば下降して平溫に復し、次いで第三日の頃に至り、乳房緊満し、乳汁の分泌増進すれば、再び三十八度以内の熱を發し、一二日にして消退す。産褥中に在る婦人の脈搏及び呼吸は、健康體に比すれば、一般に緩徐

褥婦の發熱と乳汁分泌

授乳者の食慾

なりと雖、頗る亢進し易く、少しく臥床を離るゝも、忽ち常度を超えて著るしく増多すべし。便通は腹壓の減少と、身體運動の休止とにより、秘結し易く、殊に最初の一週間は甚しきものなり。又褥婦は惡露、授乳、發汗等の爲、多量の水分を排泄するを以て、頻りに口渴を覺ゆ。而して食慾は初め二三日は減ずれども、爾後増進し、殊に授乳者に於て著るしきものとす。

産褥中の分泌増進

とは、汗、尿、惡露の分泌を云ふ。即ち褥婦の皮膚は常に濕潤し、殊に最初八日間は多量に發汗す。此の如く産褥中汗の分泌亢進するを褥汗と云ふ。尿も亦初め著しく増量すと雖、腹壓の減ずると尿道の腫張、若くは彎曲することあるによりて、一二日間は自ら排泄し能はざることあり。

第五章 褥婦の取扱法

褥婦は、他の異常なき婦人に比すれば、甚だ速に病に罹り易く、若

褥婦と病症

助産婦産家訪問  
褥婦に就て注意すべき緊要事

し一旦之に犯さるゝ時は、頗る重症となり易し、故に褥婦の取扱法に就ては最も注意を要すべく、殊に清潔及び殺菌法を嚴守せざるべからず。而して助産婦が毎常産家を訪問し、之を處置するに當りては、必ず小兒を先にし、然る後褥婦を處置すべし。褥婦に就て、注意すべき最も緊要なる事項は、熱發の有無、惡露の性状、子宮の状態、乳房の状況等にして、若し異常ありと認むる時は、直に醫士を招き、其の指圖を受くべし。決して助産婦自ら處置すべからず。今左に詳細なる取扱法を記さん。

第一 助産婦の訪問

分娩後八日間 は、毎日朝夕二回訪問するを規則とすれども、母兒共に毫も異常なく、経過佳良なることを確むる時は、時宜により一回となすも可なり。爾後第二週の終りまでは、必らず毎日一回づゝ褥婦を訪ひ、母兒兩體に注意すべし。

第二 體温及び脈膊の検査

助産婦の産家訪問期間

**助産婦は検温器** を以て毎訪問時に、褥婦の体温及び脈膊を計測して、体温表に記すべし。異常なくして安静なる者には、三十六度五分より三十七度六分の間を昇降し、脈膊は六十乃至八十を以て常とす。若し体温三十八度を超え、暫時を過ぎるも、尙下降せざる時は、異常あるが爲なるを以て、速に醫の診察を受くべし。然るに我邦に於ては、尙乳汁分泌時なれば乳熱とし、且つ産褥時なるを以て、吸収熱として、自然に放置するものあれども、助産婦は必ず注意すべきことを忘るべからず。

### 第三 悪露の検査

**産褥中** 假令正規の経過を取ると雖、悪露の附着せる壓抵布は、一定の容器又は油紙製の袋に入れ置かしめ、毎訪問時に必ず之を検査して異常なきや否やを確かめ、然る後捨つべきものとす。又産家によりて擔任醫士の屢々來診することあれば、助産婦は豫め壓抵布に番號を附し置き、初めのものより順序よく排列せしめて、醫士の検査に供すべし。

悪露に関する注意

### 第四 壓抵布の交換

**産褥** の始に於ては、悪露の排泄多量なるを以て、其の第一日にありては、凡そ二時間毎に、第二日乃至三日の頃には、三時間毎に、交換せしめ、爾後悪露の排泄減少するに従ひ、漸次交換時間を延すべく、第七日以後は一日二回となさしむべし。若し壓抵布の湿润甚だしきに係はらず、之を交換せざるか、又は交換時間遷延する時は、褥婦は不快を感ずるのみならず、臭氣甚だしく、且つ悪露は腔内若くは空氣中の細菌の爲に腐敗するに至る時は、多數の裂傷を有せる生殖器より吸収せられて發熱を來し、不慮の災害を生ずることあるを以て注意すべし。

### 第五 外陰部の清潔法

**外陰部** は、始一日二回乃至三回、又八日頃に至れば、一回宛ガーゼ又は脱脂綿を一布仙のリゾホルム溶液に浸して拭ふべし。創傷ならばキセ

壓抵布交換の注意

ロホルム又は硼酸末を撒布するを要す。然る後、外陰部には消毒せるガ―ゼを置き、其の上に二枚若くは三枚の壓抵布を重ね、丁字帯を施すべし。此の際壓抵布と丁字帯との間に、油紙を挿入する時は、悪露多量に分泌するも、褥婦の衣服其の他を汚染することなし。

不完全なる洗滌の害

**腔内の洗滌** は、正規の経過を取れるものは、敢て其の必要を見ず。却て不完全の洗滌により損傷、又は傳染病を誘發するの害あり。故に助産婦は醫士の命によらざれば漫に之を行ふべからず。

### 第六 全身の清潔法

褥婦全身の清潔法

**婦褥は悪露** の排泄あると、發汗の多量なると、沐浴せざるとにより身體甚だ不潔となり易きを以て、殊に其の清潔法に注意すべし。即ち襯衣は發汗の爲濕潤し易きが故に、屢々乾燥せるものと交換すべし。また一日一回、夏季なれば二回、微温湯にて手拭を搾り、褥婦の身體を足部に至るまで悉く拭ふべし。殊に頸部、腋窩、大腿の内面を丁寧に拭ふを要す。其

の他褥婦の手指は、總て一日數回、微温及び石鹼を用ひて洗滌するを良とす。

### 第八 強劇なる後陣痛の處置

後陣痛の緩解法

**後陣痛** 強くして、頻回發作する時は、屢々靜に子宮底を摩擦して、子宮の收縮を促し、微温濕布を貼し、温き飲料を與へて疼痛を緩解すべし。

### 第九 大小便の排泄

下劑濫用の害

**大便** は、分娩後、第四日より毎日一回づつ通利するを良とす。若し之なきときは灌腸すべし。灌腸は微温石鹼溶液中に、一食匙の食鹽を加ふる時は、通利し易し、此の如くにして尙通せざれば其の處置を醫士に依頼するを要す。決して助産婦自ら下劑を投すべからず。若し濫りに之れを用ふる時は、劇しき痙痛、又は強き下痢を來し、其の他屢々下腹内臓器の炎症を誘發するを以て、正規の産褥経過を妨ぐることあり。

尿閉時の注意

**尿の排泄** にも、亦注意するを要す。若し尿閉する時は屢々危険を來す事あり。故に分娩後は一日數回、便器を以て排尿を試ましむれば、自然に排泄するを得べし。分娩後二十四時間を經るも、尙尿を排泄せざる時は、温暖なる手拭を以て膀胱部を覆法し、尙尿を排泄せざる時は、殺菌したるカテーテルを用ひて排泄せしむべし。若しカテーテルの挿入甚だ困難なる時は、醫士に依頼すべきものとす。又尿閉時尿利をよくする飲料を與ふる時は、尿の分泌盛なるが爲、益々膀胱に蓄積するを以て、此くの如きものは與ふべからず。而して分娩後第七日間に於ける大小便排泄の際は、便器を用ふべく、決して固に行かしまむべからず。

### 第十 衣服及び臥床の交換

**衣服の交換** は、新調せるもの、或は洗濯したるものを用ひ、豫め温めて、よく乾燥せしむべし。産褥室の温度は常に平等にして、終始攝氏二十度内外を保たしめ、産褥床は直接に風に觸れざる所に設置するを要す。

産褥床の準備

凡て褥婦の衣服又は臥床の交換は、大に注意すべきものなるが故に、分娩後九日間は助産婦自ら之を交換すべし。

但し交換時褥汗の分泌多量なれば、温めたる綿布を以て身體を拭ひ、發汗の止むを待ちて後交換すべし。又豫め二箇の産褥床を並べ置き、是まで用ひし臥床より他の温め置きたる新床へ移すことは最も適當なりとす。若し別に二箇の褥床を設くること能はざる場合は、臥床を改むるの間、適宜の假床を造りて之を温め、褥婦を此處に置くべし。但し衣服及び臥床の交換に際しては、なるべく褥婦の身體を動搖せしむることなく。靜かに且つ迅速に行ふを要す。其の他褥婦をして、此の際自ら起立し、又は歩行するが如きことなき様最も注意すべし。

### 第十一 空氣の交換

**産褥室** は、又産室と同じく、相當の廣さを有し、室内の空氣は常に交換して清潔ならしむべし。又濕氣を避くるが爲に、濕りたる衣服を室内

に掛くべからず。且つ煙草其の他煙を室内に止めぬ様注意し、殊に不快の臭氣を發する便器等は、直に他に移すを要す。而して晴天の日なれば、毎日數回窓を開き、少時間開放して室内の空氣を交換すべし。此の際戶外より入り來る風を、直接に褥婦に觸れざる様注意すべし。時候不順なれば、先づ隣室を開放して、其の室内の空氣を交換し置き、次で其の室を閉ぢたる後、産褥室と隣室との間を開きて、此の内の空氣を交換すべし。又薰香を焼き香水を撒くが如きは、唯惡臭を消すのみにして、空氣を清潔ならしむるの作用なきものとす。其の他室内の掃除は濕りたる布片を用ひて拭ひ塵埃の飛散を防ぐを良とす。

## 第十二、授乳

**母の授乳** は、獨り小兒の健康を保つに大切なるのみならず、之れが爲に、褥婦は食氣を増して、營養を進め、且つ子宮の收縮を促し、惡露の閉止を早からしめ、以て褥婦の経過を善良にし、生殖器の疾病を防ぐ等、

母體に於て大なる利益あるものなり。

**授乳時間** 褥婦は數時間安眠せる後は、直に第一回の授乳をなさしむべし。俗間に於ては往々一二日間乳房に就かしめざるごとあり。此の如きは甚だ不良にして、小兒は衰弱の爲哺乳力を減じ、乳房は刺戟を受けざるを以て、分泌増進せざるに至るものなり。第一回の授乳終らば爾後時間を一定して之を與ふるを良とす。始より時間を定むれば、小兒は能く之に慣るるものなり。時として此の習慣の困難なることあれども、授乳婦の熱心により、多くは數日にして慣るるに至る。此の如き習慣は、小兒の發育に最も佳良なる關係を及ぼすものなり。之に反し、當初を不規則に授乳し、一時の愛に溺れて等閑に附すれば、終に之を改むる時期を失ふに至る。故に晝は凡そ毎二時間となし、夜間は哺乳休止時間を長くして、成るべく母兒共に安眠する様習慣せしめ、凡そ毎四時間となすべし。

**授乳の方法** 授乳せしむるには、小兒を母の膝上に坐せしめ、直立の位置にて與ふべし。若し側臥位にて授乳せしめんには一側に臥すべし。乃

授乳の姿勢

ち右方の乳房を授けんとせば、褥婦は右側に臥し、右の肘を杖きて身體を支へ、其の前膊を以て小兒を抱き、豫め清潔に拭ひ置ける小兒の口に含ませしむべし。左側の乳を授けんとする時は、左側に臥せしめ右方に於けるが如くなすなり。又分娩後九日間は坐して授乳せしむべからず。之れ蓋し子宮甚だしく壓下せられて、其下垂症又は脱出症等を發すべきが故なり。

乳房は左右交換して與ふるを良とす。小兒の哺乳するには間斷ありて、吸ひては休み、休みては又吸ふを以て、授乳婦は忍耐を以て充分長き時間授乳すべし。通常此時間を十五分乃至三十分となす。

乳房の處置

乳房の處置 總て授乳する際、乳頭及び乳暈の部を微温湯と石鹼とを以て清潔に洗滌し、後微温湯に濕したる布片を以て乳頭を牽き出し、小兒の口内に含ませしむべし。授乳終らば、再び同前の法を行ひ、清潔にして柔軟なる布片を以て乳房を被ひ、温かに保たしめんことを要す。乳房を清潔ならしむる時は、乳頭の糜爛、乳腺炎等を起すのみならず。又小兒の口内疾患を發せしむ。若し乳頭赤色となりて糜爛を呈せんとするものは、授

乳房にて窒息せしむ

乳後直にワゼリンを塗布して之を豫防すべし。

授乳時の注意

小兒哺乳の際、乳房を以て其の鼻孔を閉ぢ、呼吸を妨ぐることあらば、一指を以て軽く離し、之を害せぬ様注意すべし。且つ授乳婦は、哺乳せしめつゝ睡眠するが如きことあるべからず。然らざれば、往々過つて最愛の兒を窒息せしむるの危険あり。其の他哺乳時、殊に注意すべきは、褥婦自ら手を陰部に觸れざるることなり。若し此の注意を缺き、不潔なる手指を以て乳頭に觸るゝ時は、病毒を傳へ、更に小兒にも危険を及ぼすことあり。故に手指の汚染せる時は、洗滌したる後授乳せしむべし。乳量僅少及び乳房緊満の處置 乳汁の分泌少なき時は、牛乳其の他の滋養に富める飲料を多量に與へ、且つ屢々哺乳せしめて之を刺戟すべし、決して直に授乳を廢すべからず。又乳量多くして乳房の緊満甚だしく、褥婦疼痛を訴ふる時は、少しく食量を減し、且つ殊に飲料を減せしめ、綿布を以て乳房を提供し、其の綿布の兩端は頂部に於て結縛すべし。褥婦若し授乳すること能はざる際、此の如く乳房緊満する時も亦同様に處理す

乳房緊満痛の處置

べし。妄りに搾り出すは却て分泌を増さしむるものとす。其の他乳房に氷罨法又は冷罨法を行ふ時は、其の疼痛を減じ、且つ多少乳汁の分泌を減少せしむ。

### 授乳の困難なる場合

乳頭の甚だ短かきもの、乳頭の回陥したるもの、或は乳房の扁平にして充滿したるもの等は、授乳困難なるが故に、指を以て時々乳頭を牽き延ばすか、或は他の人に吸はしむるか、吸乳器にて之を吸ひ出さしむべし。若し小兒口を閉ちて開かざるか、或は哺乳運動を營まざる時は、其の頤を徐々に下方に牽引して口を開かしめ、舌上に乳頭を置き、乳汁を搾り出すか、又は微温の砂糖水を点滴し以て哺乳を促すべし。

### 授乳困難の處置

### 授乳の禁止

- 一 褥婦の授乳を禁すべき場合は。
- 二 脚氣及び腎臓病に罹れる時。
- 三 産褥熱其の他の熱性病に罹りたる時。
- 四 結核、梅毒、癩病等を有する時。

四 其の他の重き疾患、及び精神病、癩病、慢性的皮膚病等を有する時。

五 乳腺炎に犯されたる時、又は乳頭に糜爛、損傷等ある時。

六 身體常に虚弱なるか營養不良にして貧血せる者等。

以上の場合に於ては、醫の診察を求め、其の可否を決すべし。

### 離乳

### 離乳時の乳房處置

離乳時の處置 哺乳は適當の時日を経れば、漸々廢すべし。之を離乳と云ふ。即ち此の時期に至れば、小兒の哺乳を減せしめ、其の不足を他の食物によりて補ひ、漸次之に慣らしたる後、全く哺乳を廢すべし。此の如く母乳の不用となれる時は、乳房を綿或は清潔なる毛織物を以て軽く纏帶すべし。此の際乳房緊脹し疼痛ある時は、ワゼリン若くは其の他の緩和なる油を其の皮膚に塗布すべし。但し膏藥の類は全く用ふべからず。斯くするも乳房尙硬く緊脹せば、飲料及び營養分に富める食物を制限し、且つ大便の通利を促すべし。

## 第十三 褥婦の攝生法



精神の安静

褥婦は頗る精神過敏なるものなれば、過度なる喜怒、哀樂は勿論、高聲の談話、他人の來訪等も成るべく避けしめ、殊に分娩後七日間は全く面會を禁ずべし。

身躰の安静

褥婦は又頗る身躰の安静を要し、生來壯健の人にてても産後九日間は静臥せしむべし。褥婦若し此の攝生を守らずして、早く褥床を離れ、又は身躰を甚だしく動搖する時は、子宮の弛緩、膈及び子宮の下垂、若くは脱出等の諸症を來し、惡露も亦久しく持續するのみならず、時として恐るべき出血を起すことあり。故に大小便の排泄時、衣服及び臥床の交換時には、なるべく其の動搖を避けしむべし。産褥の経過佳良にして、毫も身躰に異常を感ぜざる時は、褥婦は往々助産婦の言を用ひず、強て褥床を離るることあるが故に、助産婦は早く離床し、若くは身躰を動搖するの危険を懇切に説明し、嚴重なる安静を守らしむべし。

離床及び運動

通常の場合に於て、分娩後七日間は就褥せしめ、身躰の自由を許し、虛弱なる婦人に於ては、一二週間就褥せしむるを良とす

而して正規の産褥なれば、二週間後にして、始めて室外を逍遙せしめ、門外の散歩は暖かき日と雖、三週間後に於てし、冬季なれば四週間の後なさしむべし。又離褥は徐々に營む様にし、假令離褥及び運動を行はしむるも、産褥期中は身躰を大切に保護し、過度の運動を禁ずべし。近時早期起立は長日間の安静よりも、反て生殖器の復舊機能を良好ならしむべしと唱ふるものあれども、醫士の指圖に従ふべきものにして、助産婦の診断のみにては決して許可すべきものにあらず。頗る危険なるものとす。

産褥中の腹帯

は、日本及び英國に於て、一般行はるる習慣にして、腹筋の恢復を促がし、懸垂腹、若くは直腹筋の離開を豫防し、或は腸管を整理する等、尤も適當なる處置法と謂ふべし。予の考案せし腹帯は、妊娠分娩及び産褥時共に應用すべく、而して腹部の大小に應じ、自由に擴大し、又縮小せしめ得べき便あり。民間にて販賣する所の腹帯は、概ね予が考案せしものを模造せしものなり。凡て腹帯は一二月間應用する時は其の効最も著明なり。

六日だれ

**温浴** 褥婦の全身浴は第二週以後に至りて、始めて之を行はしめ、坐浴は九日以後に至らざれば營ましむべからず。本邦に於ては、古來六日だれと稱し、分娩後六日目に坐浴を施すの風習はあれども、凡ての褥婦に是を行ふは甚だ危険なるを以て、之を廢せざるべからず。

**交接** 産褥期間は嚴重に注意を與へ、全く之を廢せしむべし。然らざれば往々生殖器の炎症、出血、突然の發熱等の障害を來し、産褥経過を不良ならしめ且つ之を遷延すべし。

**食物** 褥婦の食物は、分娩後三日間は、牛乳、肉羹汁、稀粥、半熟卵等の流動性食物を取らしめ、又柔軟なる良肉を食するも可なり。四日より漸次固形の食物を取らしめ、且つ充分なる營養物を與ふべし。第三週間前後に至れば、常食に復せしめて可なりと雖、尙消化し難きもの、風氣を醸し易きもの、或は強き香料等は禁せざるべからず。

**飲料** は、麥湯、微温湯、砂糖湯等を飲ましめ、一週間後に至れば、薄き珈琲及び茶の如きものを用ふるも害なし。但し其の濃厚なるものは禁

飲食物

すべし。又産褥中強き酒類は飲用せしむべからず。然れども、少量の麥酒は乳汁の分泌を増進するの効あるを以て飲用せしむるも可なり。

### 第十四 授乳婦の飲食物其他の要件

助産婦は授乳婦に向ひ、理解する様懇切に、授乳中注意すべき事項を教示すべし。就中授乳婦の生活法は、平素と大差なきを良とす。但し食物中乳汁の質を害すべき品は避くべし。即ち酸味及び香ひ高き食物、強き香料鹽漬の食物、脂肪多き食物、身體を温暖ならしむべき飲料等は禁すべき者とす。麵類は授乳婦に適當なる食品なり。其他の滋養物及び飲料等は褥婦に於けるものと同じ。授乳婦の大便秘結する時は、適宜の運動を營ましめ、煮たる果物を食し、稀薄なる飲料、殊に砂糖水を飲めば多くは通利を得べきものなり。之に依りて尙通せざらば灌腸を行ふべし。又長き間狭き室内にありて運動不足する時は、乳汁分泌の量減少するのみならず、其の性質を悪しくするが故に、適度の運動は甚だ必要なるものなり。又食物及

授乳婦に對する注意

び夜間休息の不足等も其の分泌を減せしめ、其の性を不良ならしむ。其の他授乳婦に於ける精神の感動等に由りても、乳汁の分泌量及び性質に變化を來たすものなれば、注意せざるべからず。乳房は常に温暖に保ち、壓迫を防ぐを要す。授乳期中に妊娠する時は、其の授乳を廢し、小兒は乳母に就かしむるか、又は人工營養を行ふべし。授乳期間に於て月經來潮するも、母兒共に害なきものなれども、時として小兒は二三日間不安となることあり。

## 第六篇 新生兒生理篇

### 第一章 新生兒の定義

新生兒即ち初生兒てふ名稱は、これを娩出後幾日間の乳兒に對して付す可きや未だ一定の説なしと雖、現時最も廣く行はると説二あり。其の一は娩出より臍帶の脱落に至る迄、他の一は臍帶脱落后創面の治癒するに至る迄の期間を稱す。

### 第二章 新生兒の生理

現今世人の多くは、乳兒も亦一個の獨立したる人體なれば、身體諸機關の如きも單に大人を縮小したるものに過ぎざる可しとの謬見を抱くが如しと雖、こは當らざる事甚だ遠く單に其の外觀のみを以てするも、新生兒及び乳兒にありては、其の頭蓋の形態甚だ大にして、身體他部との調和を缺く事一見明瞭なり。而も更に其の解剖的乃至組織的の變化に至りては、殊

數生兒

に甚だしきものあるを認む可し。

以下主として、成熟児の生理的發育状態に關し述ぶる所あらんとす。

### 第一 體重

體重

新生児の體重は、兒の大小、男女、人種、父母の年齢、營養状態及び初産と經産との關係に依りて一定せず。

日本成熟児の體重は、三島に依れば、男兒は平均三千四百瓦、

女兒は平均二千八百七十瓦、三輪に依れば、男兒は平均二千八百六十五瓦、

女兒は平均二千八百六十二瓦、更に榎の調査に依れば、男兒は平均三千六

十二瓦、女兒は平均二千七百十四瓦なりと云ふ。要するに日本成熟児の平

均體重は三千瓦弱なりとす。

新生児の體重は、娩出後引き續き増量するものにあらずして、其

の初に於ては、胎便、尿、肺、皮膚よりの排出旺盛なる脂肪の燃焼及び不

充分なる哺乳に依り、生後二日乃至三日以内に二百乃至三百瓦の體重減少

生理的體重減少

を來すものなり。而も、漸次又再び増量し、生後八日乃至十日頃には、已に生時の體重に回復す。此の一過性體重減少を生理的體重減少と稱す。

體重の増減は、乳兒營養法の如何に依りて同一ならず。人乳營養

兒にありては、體重の回復速なるも、未熟兒及び人工營養兒にありては、

其の減量著しく且つ體重回復に要する日數も亦更に長し。一般に女兒は男

兒に比して多く減量し、回復すること亦遅きを常とす。

左に參考として、カメレルの表を掲ぐ。

カメレル體重増減表

各週の終		人乳營養兒	牛乳營養兒
分	燒當時	三四三三瓦	三四六七瓦
第 一 週		三四〇八瓦	三三一四瓦
第 二 週		三五六七瓦	三三八四瓦
第 三 週		三七八一瓦	三五五七瓦
第 四 週		四〇〇八瓦	三六八三瓦

第 八 週	四九〇七	四三〇三
第 十 週	五六〇〇	四九一一
第 十 三 週	五六九三	五〇九三
第 十 六 週	六二九四	五五三二
第 二 十 週	六八二四	六一八一
第 二 十 四 週	七二八九	六八三六
第 二 十 六 週	七五〇五	七二七八
第 二 十 八 週	七七七四	七二〇七
第 三 十 二 週	八一七五	七七八三
第 三 十 六 週	八六五五	八一六一
第 三 十 九 週	八六七四	八四七〇
第 四 十 週	八八五五	八三〇六
第 四 十 四 週	九二三二	八七八二
第 四 十 八 週	九五八九	九一九二
第 五 十 二 週	一〇一四一	九六二四

右の表は、一見甚だ精密の如き観あれども、元來體重の如きは各人各様

にして、決して一定のものにあらざるを以て、實際に於ては極めて大體の近似數を得るを以て、反つて合理的となす。

左に掲ぐる體重算出の式は、京都醫科大學平井教授の考案せるものにして、生後滿一ケ年に至る生兒各月の體重算出に頗る便なり。

$$3000 \text{ 瓦} + 30 \text{ 瓦} \cdot \text{月數} (28 - \text{月數})$$

右の式中月數は、生兒の滿月數を意味するなり。又滿一ケ年以上、滿九歲迄は左の式に依る。

$$9 \text{ キロ瓦} + 1.5 \text{ キロ瓦} (\text{年數} - 1)$$

右式中年數は兒の滿年數を意味す。

## 第二 身長

新生児の身長は體重と同じく、人種男女の別等によりて一定せず。又調査せし人口に依りても一定せざる事左表の如し。

### 體重の算出法

### 身長

年 齢	ケトレ		三 島		榑		三 輪	
	男	女	男	女	男	女	男	女
分 娩 時	五〇・五	四九・四	四九・一	四八・七	五〇・四	四七・三	四八・八	四八・一
一 年 年	五九・八	六九・〇	七三・五	七二・九				
二 年 年	七九・一	七八・一	七九・五	七八・九				
三 年 年	八六・四	八五・四	八五・四	八四・九				
四 年 年	九二・七	九一・七	九一・七	九一・〇				
五 年 年	九八・七	九七・四	九七・四	九六・五				
六 年 年	一〇四・六	一〇三・一	一〇二・八	一〇二・四				

身長に於ても右表中に見るが如く、各人決して一樣のものにあらず。極めて大體の近似數を得るを以て、反つて當れりとなす。平井教授の身長算出式は生後三ヶ月より滿一ケ年に至る迄の身長算出法にして左の如し。但滿一ヶ月には七仙米滿二ヶ月は更に二仙米を増すべし。  
 $49 + 7 + 2 + 1.5$  (月數-2)  
 滿一ケ年以上は、毎年平均二仙迷ぶる増加する割合にして左の式に従ふ

頭圍と胸圍

とす。

$73 + 5.25$  (年數-1)

第三 頭圍と胸圍

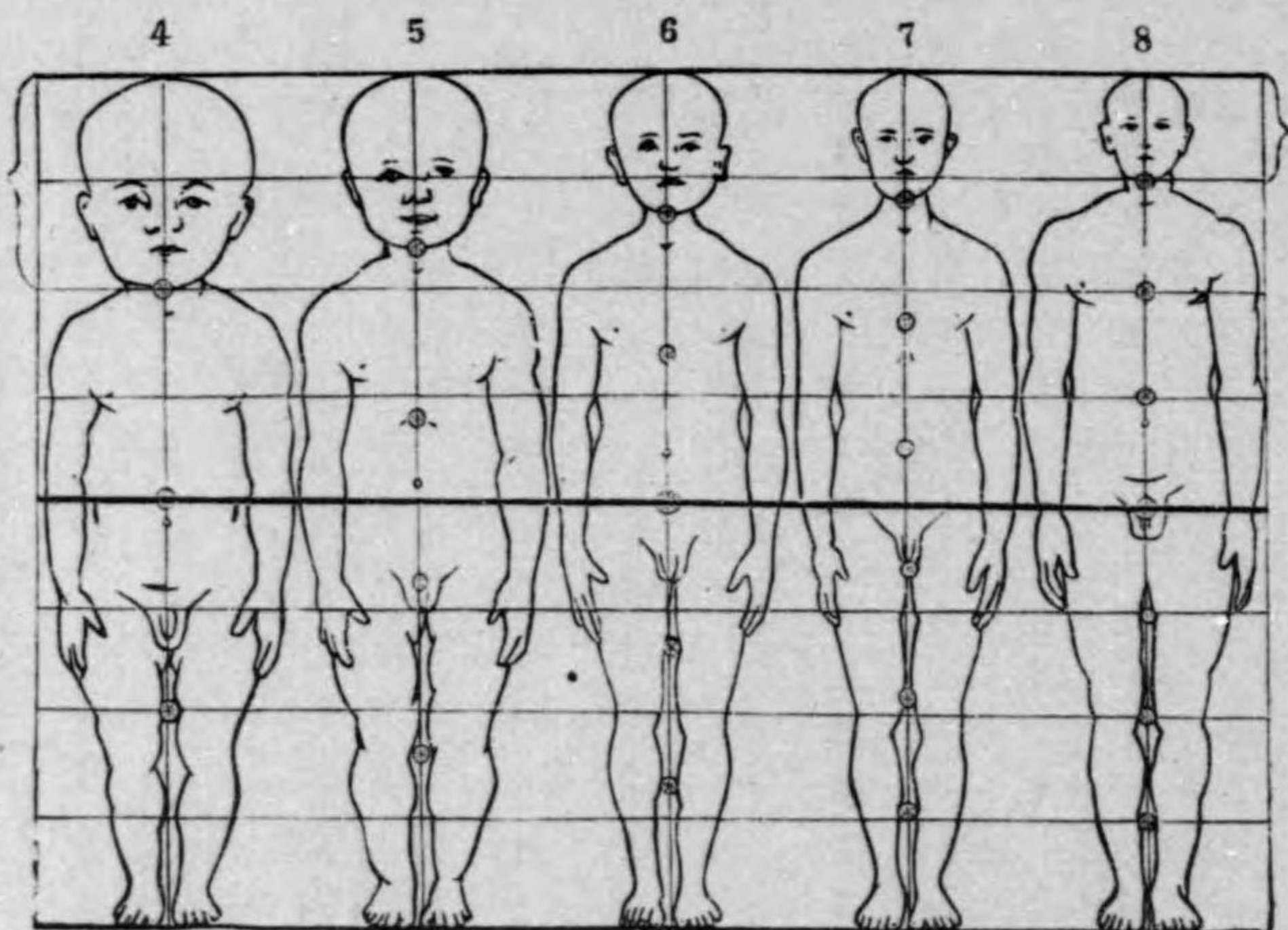
とは、新生児の大小に依りて一樣ならざるものにして、頭圍とは前頭結節と、後頭結節とを連結圍繞したる計數にして、即ち頭蓋の周圍徑を云ふ。

頭圍及び胸圍は、三島に依れば左表の如し。

頭圍の表

年 齢	ケトレ		三 島		榑		三 輪	
	男	女	男	女	男	女	男	女
新 生 兒	三三・八	三三・三	三三・三	四九・三			四八・七	
一 ヶ 月	三六・九	三六・五	三七・五	五〇・六			四九・九	
七 ヶ 月	四二・八	四二・〇	四二・〇	五二・一			五二・二	
一 年 年	四五・四	四四・一	四四・一	五三・〇			五三・三	
三 年 年	四七・六	四六・九	四六・九					

第百六十五圖  
頭部の高さ



新生児 二年 六年 十五年 二十五年  
發育の割合

身長と胸圍との關係は、健康兒にありては胸圍の大きは身長より七仙迷以上大なるものとす。

頭高と身長との關係は、年齢に依り著しき差あり。新生兒にありては、頭部の高さは身長に比し甚だ大なるも、年齢の長に比し從ひ、次第に其の比例を失し、減少するものとす。即ち、新生兒の身長は頭部の高さの四倍にして、二年兒に於ては五倍、六年兒にありては六倍、

胸圍の表

年齢	男	女
新生兒	三二・四	三二・三
六ヶ月	四二・五	四一・六
一年	四五・七	四四・四
三年	四八・一	四七・二
五年	五〇・五	四九・八
七年	五四・一	五三・〇
十二年	六三・一	六二・五

即ち滿一ヶ年にして、頭圍と胸圍とは略、同一の大きさとなるなり。今頭圍と胸圍との關係を表示すれば左の如し。

年齢	頭圍(平均)	胸圍(平均)
新生兒	三三・五	三二・三
一年	四五・〇	四五・〇
二年	四五・五	四六・五
五年	五〇・〇	五二・〇
十年	五二・〇	六〇・〇
十二年	五三・〇	六二・〇
十五年	五三・〇	七〇・〇

十五年兒にありては七倍、大人にありては八倍となるものなり。

### 第四 大顛門の閉鎖

#### 大顛門の閉鎖

大顛門は、兩顛頂骨と前頭骨との三骨によりて境界せられ、皮膜にて被はる、菱形の骨間隙にして、分娩後一定時の後には多少開大するも、又漸次縮小して平均生後十三四ヶ月にして全く閉鎖す。生後二十四ヶ月以上に至るも閉鎖せざるものは病的なり。

顛門の大きさの測定法には、エルゼツセル測定法と、縦横徑測定法とあり。

#### 顛門測定法

一、エルゼツセル測定法 は、互に相對せる菱形縁の甲乙各中央より、其の互の距離を測り、其の計數を合し、これを二分したる平均數を以て示さるるものにして、新生兒の大顛門は通常二五・一仙迷なり。

二、縦横徑測定法 は、其菱形顛門の縦徑の一隅と、他の對せる一隅の距離と、横徑の同様一隅と、他隅との距離とを測定し、以て其大きさを示すものなり。  
日本人の計數は凡そ左の如し。

縦	徑	男	女
横	徑	一・三仙迷	一・六仙迷
		一・五仙迷	一・九仙迷

### 第三章 體溫

#### 體溫

新生兒の體溫は、分娩直後に於ては平溫より稍々高温にして、暫時の後、平溫以下に下降し、次で十數時間の後平溫に復す。乳兒の體溫は大人に比し、概して幾分の高温を示すものなるも、早産兒又は假死に陥りたる小兒は健康兒に比し、分娩直後に於ける體溫の下降著しく、常溫に復する事も亦遅しとす。分娩後體溫の一时的下降するは生兒の物質代謝作用猶未だ旺盛ならざると、且つ子宮内に於ける胎兒が初て低温なる大氣中に暴露せられ、身體を冷却するが爲なり。然れど一定時の後は、生兒自ら物質代謝作用を營み、依つて以て溫を發生し、體溫の上昇を來すべし。



新生児の體温は、大人のものより異なり、安静、啼泣、睡眠及び身體の動搖等に依りて、容易に差異變動を起すものなり。これ即ち新生児の皮膚、上皮、細胞層の菲薄なると、血管に富めると、體表面積の體重に比し大なりと、且つ又温調節機能の不完全なるに依るものなり。

### 第四章 脈搏

脈搏

新生児の脈搏は、分娩直後に於て、百五十乃至百九十を算し、數月内に百四十前後となる。女兒は男兒に比し、概して二乃至三搏多し。乳兒は脈搏不定にして、僅の身體動搖等に依りて、著しく變動を來すものなり。而して小兒の脈數は、年齢と共に減少する事、左表の如し。

年齢	時間	脈數	年齢	時間	脈數
一ヶ月以内	一分間	百二十乃至百四十	八	一分間	九十
一年	一分間	百二十乃至百四十	十	一分間	九十
二年	一分間	百二十乃至百四十	十二	一分間	九十
三年	一分間	百二十乃至百四十	十五	一分間	九十
四年	一分間	百二十乃至百四十	二十	一分間	九十
五年	一分間	百二十乃至百四十	三十	一分間	九十
六年	一分間	百二十乃至百四十	四十	一分間	九十
七年	一分間	百二十乃至百四十	五十	一分間	九十
八年	一分間	百二十乃至百四十	六十	一分間	九十
九年	一分間	百二十乃至百四十	七十	一分間	九十
十年	一分間	百二十乃至百四十	八十	一分間	九十

### 第五章 呼吸

横隔膜呼吸

新生児の呼吸は、主として腹式、即ち横隔膜呼吸をなす。これ新生児及び幼兒の肋骨は、脊柱と殆んど直角をなし、常に恰も大人に於ける吸氣状態にあるを以てなり。又其の呼吸運動に至りては、時に甚しく不正なる事あるも、他に異常なくんば意に介するに足らず。呼吸數は年齢に依り。一樣ならず新生児にありては、二十二乃至四十四にして、三年乃至四年に至れば、三十五乃至二十五に減じ、七年乃至八年に至れば更に、二十八乃至二十五に減するなり。

呼吸と、脈搏との比例は、左の如く記憶せば、簡單にして實用的なり。

年 齡	呼吸 數	脈 搏 數	年 齡	呼 吸 數	脈 搏 數
新 生 兒	四五	一四〇	三 年	二五	一一〇
六 日	三五	一三〇	六 年	二〇	一〇〇
一 乃 至 二 年	三〇	一二〇	大 人	一八	七二

### 第六章 消化器

**新生児の消化器** は、解剖及び生理學上、大人と異なる點甚だ多し。  
**口腔** は、兩顎に齒牙を有せず、食餌は乳汁其の他、凡て液體のみなるを以て、咀嚼する必要なく、従つて咀嚼筋の發育不完全なり。然れど其の乳汁を吸引する力は、已に可成に強く、且つ兩頰内面には吸阜と稱する粘膜凸起ありて、乳汁の吸引に便す。但し乳汁の流出は、單に兒の吸引のみ依るにあらずして、乳頭括約筋の反射的弛緩及び母親の精神作用等大に與つて力あるものなり。

糖化作用  
垂涎

**唾液腺** は、未だ充分に發育せざるを以て、殆んど糖化作用を有せざるも、乳汁中には唾液腺分泌液中のプチアリンの、影響を受く可き物質少量なるを以て何等の支障なし。生活六ヶ月頃に至れば、唾液の分泌旺盛となり、従つて垂涎するに至る。

**胃** は、新生児、嬰兒等にありて、胃壁筋肉の發育充分ならざるを以て、膨滿せる腸管の爲に上方に壓せられ、胃小彎は寧ろ、水平の位置を採りて、脊柱の方に向ひ、大彎は腹壁に向ひ居るも、兒の起立歩行するに至れば、寧ろ垂直の位置を採るに至るものなり。

胃の内容を知るは、人工營養を行なふ場合に頗る必要なり。  
 パウンドレルに依れば、生後一ヶ年間の胃内容は、大略次の如し。

- |         |         |
|---------|---------|
| 新 生 兒   | 五〇立方仙迷  |
| 一 箇 月 兒 | 九〇立方仙迷  |
| 二 箇 月 兒 | 一〇〇立方仙迷 |
| 三 箇 月 兒 | 一一〇立方仙迷 |

四箇月兒	一二五立方仙迷
五箇月兒	一四〇立方仙迷
六箇月兒	一六〇立方仙迷
七箇月兒	一八〇立方仙迷
八箇月兒	二〇〇立方仙迷
九箇月兒	二二五立方仙迷
十箇月兒	二五〇立方仙迷
十一箇月兒	二七五立方仙迷
十二箇月兒	二九〇立方仙迷

然れど、日本人にありては、西洋人と同様なる事能はず、少しく少量なるものと見るを至當とす。

胃液の分泌

胃液の分泌は、新生児にありても、已に存在し、哺乳に依りて胃に送られたる乳汁は、酸に依りて凝固す。此の凝固は牛乳にありては、迅速且つ粗大なるも、人乳にありては、徐々にして細微なり。

カゼインの凝固する時は、残餘の乳漿はペプシン鹽酸の爲に、直ちに消

消化時間

化せられ、漸次腸内に輸送せらる、而して一方カゼイン凝絮は、其の表面より漸次消化作用を受くるものなるを以て、此等凝絮の未だ全く消化せられ終らざるに先立ちて、新なる乳汁が嚙下せらるゝ時は、消化液と凝絮とは直接に接触し能はず、爲に大に消化作用を害せらるゝものなり。

胃内に於ける食餌の消化時間は、其の食餌の性質に依りて同じからざれども、人乳は二時間、牛乳は三時間にして胃を辭するものなり。脂肪に富める食餌は、胃より排出せらるゝ事遅しと云ふ。

腸に於ける消化作用

腸に於ける消化作用は、大人のものとは大差なく、腸附屬腺なる膵臓、及び肝臓より分泌せらるゝ酸酵素、刺戟素等は、已に新生児に於ても存在し、充分なる消化作用を營爲し得るものなり。食餌が腸を通過するに要する時間は、一定せざれども、十二時間乃至三十六時間を普通とす。

乳糖の如き含水炭素より成る物質も、兒の腸内消化作用完全なる場合には、ラクターゼなる酸酵素に依り、可吸收物質に分解せられる。腸消化作用の損せらるゝ場合にありては、乳糖は其の儘吸収せられて尿中に排出せらる。

常習便秘

腸管の長さは、幼児にありては大人に比して長く、大人は平均身長の五倍位なるも、新生児にありては、身長の六倍乃至八倍位にして、而も腸管壁筋肉の發育不完全なるを以て、往々常習便秘に苦しむ事あり。

### 第七章 排便

排便

分娩後初めて排泄する大便は、帯赤綠色又は帯黒綠色にして、

胎糞

弱酸性の反應を有し、軟坩状を呈して無臭なり。これを胎便、又は胎糞と云ふ。其の成分は胎児の腸、及び其の附屬腺の上皮細胞、及び分泌物、又は嚥下せる羊水毳毛等より成る。其の量平均八〇グラムなり。

胎便の排泄は、凡そ三日乃至四日にして終る。其の以後に至れば、漸次に帶黄色となり、稍濃厚なる粥の如き状を呈す。便通の回数は、一日一回乃至二回となす。

母乳、又は乳母乳を以て營養したるものによりては、大便は黄金色にして、軟膏状の硬度を有し、同質にして稍酸性の芳香臭あるものなるも、普

排尿

通一般の兒は、かゝる模範的の大便を排出せざるなり。通例は、多少綠色の粘液を混じ、又は顆粒を混する事あり。一見破碎散亂せるが如き状を呈する事あり。又往々にして、排泄時は黄色なるも、暫時の後綠色に變ずるものあり。

是等のものは、必ずしも悉く病的のものにはあらず。如斯大便を排出すると同時に、兒が發熱し、又は不機嫌を來す等の事あらば、始めて大に注意を要するに至るものなり。然れども、人工營養兒にありては、これに反し、發熱、不機嫌を伴はざるも、已に一定の注意を必要とす。

### 第八章 排尿

分娩第一日に於ける排尿は、極めて少量にして、一日の排尿量三十乃至三十五立方仙迷を越ゆる事稀なり。然るに、生後第四日乃至一週間に至れば、急に尿量増加して一日二百立方仙迷に及ぶ。而して一日間の排尿回数は、大略一日間の哺乳回数に三倍するものなり。

新生児の尿

**尿の性状** は、初め酸性にして、大なる比重を有し、濃厚なる黄色又は樺色を呈し、混濁す。これ尿酸鹽の多量を含むに因るなり。生後第五乃至第六日に至れば、尿量の増加と共に、色は淡黄色にして透明となり、弱酸性、又は中性の反應を呈し、比重減少す。

新生児の尿中に、蛋白及び圓錐を證明し得るは、殆んど生理的現象と見て可なり。

### 第九章 新陳代謝機能

最近醫學の進歩は、殆んど奇蹟の如く、昨日の最新は已に今日の最新にあらす、駭々として、正に日進月歩の偉觀を呈せり。就中最近に於て重要な進歩の跡を示せるものは、物質代謝の研究にして、新生児の新陳代謝に則ち物質代謝に對する吾人の知見も、亦眞に昔日の比にあらす。新生児の新陳代謝機能の智識を缺けるは殆んど新生児に關する凡ての智識を缺けるにも等し、依つて茲に少くも新生児の新陳代謝機能中、一般に涉る部分

を略述す。これ實に生命の持續に對する絶對必要の條件なればなり。

#### 第一 新生児期間に於ける新陳代謝作用

新陳代謝の状態は、尿の研究に依りて明白となる。特に尿中に排泄せらるる窒素量の検査に依りて、新生児が攝取せる乳汁中の蛋白質が、如何なる程度に於て利用せられしかを知り得可し。

斯の如くにして、得たる結果に依れば、生後二週間以内に於ては、攝取したる量の七八三布仙、生後二乃至三ヶ月頃に於ては、四〇八布仙、生後五ヶ月頃に於ては二三一布仙は體內に利用せらるるものなり。其の他鹽類の代謝作用も行なはれ、攝取したる量の約五六四布仙は體內に利用せられ、大部分、殊に石灰質、及び磷酸鹽は、主として骨の發育に利用せらる。

#### 第二 新生児期間に於ける消化作用

新生児の食餌に對する消化作用が、幼兒に比し薄弱にして、殊に牛乳營

新生児の代謝作用

養兒に於て、最も屢々障礙を來すは何故ぞや。此の疑問を解決せんと欲せば、須らく新生児と、幼兒との消化管内に於ける、營養素の分解、及び吸収の状態を明かにせざる可からず。

### 一 蛋白質分解に必要な醱酵素

蛋白質分解  
に必要な  
醱酵素

蛋白質分解に必要な醱酵素は、人の知る如く「ペプシン」にして、新生児の胃液中に發見せらるゝのみならず、已に第四ヶ月の胎兒に於て、これが分泌を證明し得らる。新生児の「ペプシン」分泌量は、最初極めて少量にして、生後第三ヶ月頃よりして、漸次一定量、且つ大量を分泌し來るものなり。其の他鹽酸及び「ライプ」醱酵素の如きも、已に新生児第一日に於て、これを胃内容液中に證明し得るなり。「トリプシン」の如きも、膵臓分泌液中に含有せらるゝ事は、已に知られたる事實なり。又唾液の分泌を促進す可き、「ゼクレチン」の如きも、已に成熟兒の腸内容にこれを證明し得らる。

含水炭素分  
解に必要な  
醱酵素

### 二 含水炭素分解に必用なる醱酵素

「アルブモリン」及び「ペプトン」を分解す可き醱酵素たる「エレプシン」の如きも、成熟兒は勿論、已に未熟兒の消化管内に於て、これを證明する事を得可し。  
乳糖を分解す可き醱酵素「ラクターゼ」は、成熟兒の消化管内には勿論、胎糞中に於てもこれを證明し得らる。  
蔗糖を分解する醱酵素「インベルチン」及び「サツカナナーゼ」の如きも、已に新生児の消化管内に存在するが故に、天然營養兒にして、蔗糖を攝取せざるものにおいて、徒らに糞便中に排泄せらるゝに過ぎず。  
麥芽糖を分解する「マルターゼ」の如きも、亦新生児消化管内に存す。  
澱粉溶解素なる「ヂアスターゼ」は、新生児の消化管内に存するが如し。「プリアリン」は其の存否一定せず。

### 三 脂肪分解に必要な醱酵素

脂肪分解に  
必要なる  
醱酵素

「パンクレアステアプシン」は、已に新生児の消化管内に證明する事を得可し。

以上の如く、各種の醱酵素に依りて分解せられたる營養素は、腸管の上皮細胞に依りて吸収せられ、再び各種の異なる營養素に構成せられて、淋巴管より血液に入り、以て全身の營養に充當せらるゝものなり。  
斯くの如くして攝取せられたる食餌が、消化管内に於て分解せられ、有用なる一部は身體に吸収せられ、不要なる一部は糞便として排泄せられ、而も吸収せられたる有用なる一部も亦、身體各部に於て適當に使用せられ、老廢物となりし不要のものは、尿となり、汗となり、或は瓦斯となりて體外に排泄せらる。如斯、機能を所謂新陳代謝機能と稱するなり。

老廢物

### 第十章 臍帯の脱落

#### 分娩後臍帯の脱落

するまでの期間は、ワルトン膠狀質の多少に依りて一樣ならざるも、普通五日乃至一週日を要するものなり。而も、十日乃至十五日頃に至れば、臍帯の脱落面は癒合して完全なる臍を形成す可し。

**早産兒又は病兒** は、一般に臍帯の脱落遅延するのみならず、臍部より屢々種々の障害を來す事あれば、助産婦は常に注意を怠る可からざるものなり。

### 第十一章 新生児の乳腺

新生児の乳  
腺

**新生児の乳腺** は、生下直後に於ては極めて微小のものなるも、生後兩三日を経過すれば漸次肥大して豌豆大となり、壓迫すれば最初は無色の液を出し、次で混濁せる少量の液を漏らす可し。此の液を顕微鏡下に検査する時は、後章述ぶる所の初乳と稱するものと、相似たる成分を有するを知る可し。

生後十四日目の乳児の乳腺より壓取したる液の成分は、次の如きものなり。

水分	九五七〇五
カゼイン	〇五五七
アルブミン	〇四九〇
脂肪	一四五六
糖類	〇九五六
鹽類	〇八二六

時として、生後第一日に於て已に乳汁の分泌を見る事あれどもこれは例外なり。普通二乃至三週間の後、乳腺は退化して乳汁の分泌をなさざるに至るものなるも、時としては數ヶ月間の乳汁分泌を見たることあり。

斯くの如く、新生児に乳汁の分泌を見るは、母體に於けると同様、胎盤及び卵巣より來る刺戟素の作用に基づくものなりと云ふ。かくして分泌せらるる新生児の乳汁を魔乳と稱す。魔乳は猥りに搾出す可からず。これ時と

魔乳

して炎症を惹起する虞あればなり。

第十二章 五官器

五官器視覚

一 視覚 諸學者の研究に依れば、新生児は分娩直後又は分娩後數時間に於て、已に明暗を識別し得るものなり。但し眞に物體を見得るは生後一週に於ても猶不可能なり。これ視神經の猶未だ完成せざるが爲めなりと。

眼球の運動も亦左右一致を缺き、一側右方に廻轉するも、同時に他側は左方に廻轉するが如き事あり。眼瞼の如きも一致の運動を缺き、一方眼瞼を開き居る場合、他方は全然閉ぢ居るが如き事あり。何れも生理的現象なり。

二 聴覚 凡て生児は、分娩直後に於て聾者なり。それは鼓室内に空氣を缺除するが故なり。

數時間の呼吸の後、鼓室に充滿せる黄色の液體及び膠様物質は排出せられ、空氣これに代りて鼓室を占領するに至れば、音響を感受するを得べし。



故に多くの新生児は、已に生下第一日中に強き音響に對して反應するに至るものなり。

味覺

三 味覺 新生児は、味覺を有するのみならず、已に甘、鹹、酸、苦、等を區別し得るが如し。

嗅覺

四 嗅覺 新生児の嗅覺は、生後第一日に於て已に存し、強烈なるものに對して殊に然るが如し。

觸覺と溫覺

五 觸覺及び溫覺 新生児は、勿論胎兒に於ても末期にありては、已に觸覺及び溫覺を有するが如し。殊に其の粘膜に於てはよく發達せるものなり。

皮膚胎脂

### 第十三章 皮膚

新生児の母體を離れたる直後に於ては、其の皮膚は皮脂及び表皮細胞より形成せられたる軟膏狀の物質に被はるゝを見る可し。これを胎脂と云ふ。こは第一回の沐浴に際して、「ワゼリン」を以て充分に拭去す可きものなり。

兒斑

### 第十四章 兒斑

皮膚の色は眞紅色なるも、手足の末端に於ては、稍紫藍色を帶ぶる事あり。此の部分は稍寒冷に感ぜらる。生後兩三日の中、紅斑又は表皮の脱落を見る事あるも、意に介するに足らず。

人種の如何を問はず、生下直後に於ては、皮膚は赤色にして、何等の區別を認むる事能はざるも、生後兩三日乃至數日を経過するに至り、漸次白色、黄色、銅色又は黒色人種等の別を生じ來るなり。これ皮膚眞皮層中にある色素細胞内の色素が、太陽の光線に依りて顯はれ來り、其の多少に依りてかゝる區別を生ずるに依るなり。即ち黄色、銅色、又は黒色人種にありては、此の色素の量漸次多量なるにあり。  
兒斑の如きも、白色人種の新生児にありては、これを見る事甚だ稀なれども、有色人種の新生児にありては、一般に多少の兒斑を見ざる事なし。

此の兒班の最も普通に存する部分には、腰部又は臀部にして、時に背部等に見らるゝ事あり。これ此の部分に限り、皮膚眞皮層中に特別なる紡錘形の色素細胞を有するに因る。此等兒班は、歳と共に漸次其の濃度を減じ、普通第二生齒期前後に至れば消滅するものなり。

### 第十五章 齒牙の發生

#### 齒牙發生期

小兒齒牙の發生時期は、之を前後二回に區別す。

第一期は、乳齒と稱し、上下二十枚の發生あり。今これを表示すれば、

六ヶ月乃至九ヶ月	下顎内門齒—上顎内門齒—上顎外門齒—下顎外門齒
十二ヶ月乃至十五ヶ月	第一小臼 四個
十八ヶ月乃至二十ヶ月	犬齒四個
廿ヶ月乃至廿四ヶ月	第二小臼齒四個
四年乃至五年	第一大臼齒四個(永久齒)

六年又は七年頃に至れば、第二生齒期に達す。然る時は、乳齒は其の發

#### 永久齒

生の順序に依りて、漸次交換して永久齒を生ず。

生齒發育の程度は、各人一樣ならず。精神發育に障礙あるもの、營養障礙にかゝれる者、佝僂病及び微毒患兒等にありては、甚しく遅延する事あり。又時としては、生れながらにして已に齒牙の發生せるを見る事あり。

### 第七編 新生児養育法

#### 第一章 新生児の取扱法

##### 第一 臍帯の處置

臍帯處置と消毒法

臍帯を處置するに當り、消毒殺菌等の智識なかりし時代に於ては、臍創面より種々の病菌侵入し、丹毒、破傷風、膿毒症、及び敗血症等の爲に命を損する者頗る多数ありしが、殺菌法の智識を應用するに致りて、創傷傳染病の爲に死亡する者大に其の數を減するに至れり。故に、臍帯を處置するに當りては、嚴密なる殺菌法を行はざる可らず。

臍帯を處置するには、普通分娩後、臍帯搏動の止むを待ち、臍帯の胎兒附着部より數仙迷の處にて、幅〇五仙迷の殺菌せる麻布紐を以て重複結紮を行ひ、其の間を消毒殺菌せる剪刀を以て切斷し、沐浴後更に八〇乃至八

臍帯

五布仙の「アルコール」を以て、臍帯及び臍帯附着部の腹壁皮膚を拭ひ或は一度丁幾を塗布したる後、臍帯附着部より約一仙迷の所にて更に結紮を行ひ、臍帯遺残部を第二結紮部より、約半仙迷の所にて切除し、然る後殺菌せる「ガーゼ」を以て充分丁寧に被包し、更に殺菌ガーゼを以て被ひ、臍帯を施す可し。

母よりも小兒を先に處置す

從來臍帯切斷部を處置するに當りて、「デルマトール」又は「アイロール」等の防腐劑を撒布せしも、反つて此等のものよりして、有毒菌の傳染を介助する場合あるを以て、最近の學說に於ては、これを禁じ、只切創面の糜爛又は濕潤せる等の場合にのみ、これを乾燥せしむる目的を以て防腐藥を撒布することを許可せり。但し産家を訪問するに當りては、必ず母よりも小兒を先づ處置せざる可からず。

小兒の沐浴を終りたる後、臍帯斷端を處置せんとするには、助産婦は先づ其の手指を石鹼を以て能く洗滌し、千倍の昇汞水にて殺菌したる後、臍帯を取り扱ふ可し。此の場合よく注意して、臍帯の軟化、化膿、臍輪の發

赤又は腫張の有無を検し、若し是等の障礙ある場合は、直に醫治を乞ふ可し。又其の結紮部を検し、出血なきや、結紮糸は弛み居らざるや等を檢し、若し疑はしき時は、更に緊しく結紮を施したる上、殺菌ガーゼにて充分に被包したる後、臍帯を施す可し。而して臍帯脱離し、其の創面全く癒ゆるまでは、沐浴毎に「アルコホル」を以て創面の消毒を行ふを可とす。其の他の撒布薬を用ふるの必要なし。「ガーゼ」の固着したるものは、よく濕潤せしめたる上、徐々にこれを取り去る可し。

沐浴の可否

沐浴の可否に就き諸説一ならずと雖、未だ定説なし。只充分清潔なる状態の下に行なふ可し。臍帯に關してのみ沐浴の可否を論ずるは、餘りに狭量なりと云はざる可らず。沐浴は他に重要な目的と、意義とを有するものなるを以て、臍帯の脱離を少しく遅延せしむるが如きは、何等問題にあらず。沐浴は依然として充分なる注意の下に行ふ可きものなり。

第二 沐浴

一日一回の沐浴

沐浴は、小兒身體の清潔に必要なのみならず、身體を溫暖にし、從つて其の生活機能を活潑ならしむる作用あるが故に、最初數ヶ月間は、怠たらず沐浴を行ふべし。

浴湯の温度

は、攝氏三十九度乃至四十度を可とす。泰西の書には、三十七乃至八度を可とすと記載せるも、家屋の構造を異にする日本の家庭にありては、體温より少しく高温なる可し。浴湯の温度は、毎回檢温器を用ひて之を定む可し。否らざる時は、或は熱きに過ぎて、皮膚を損傷することあるのみならず。甚敷時は、全身の痙攣を發せしむる事あり。

沐浴の方法

は、豫め準備せる清潔なる浴槽に、上記の温度を有せる温湯を注ぎ、深さ五乃至六寸に達せしむ。其の方法としては、小兒の頂部を助産婦の左手の前膊上に安置し、手指を以て兒の兩手を把握し、更に右の手掌を以て臀部を受くるか、又は兩脚を握みて槽中に入れ、暴力を加

沐浴の方法

ふる事なく、極めて静かに柔かき布片を以て洗ふ可し。此の際助産婦自己の足を浴湯中に浸し、或は強く皮膚を拭ふが如きことある可らず。又沐浴の際は、小児の耳孔、眼、口腔等に浴湯の入りざる様注意す可く、特に眼は決して浴湯に觸れしむる事なく、別に清潔なる温湯を器中に盛り置き、軟かき布片又は綿花を浸して、外背より内背に向け、極めて軽く拭ひ去る可し。口腔内も注意して、別の清潔なる温湯を以て可嚙に拭ふ可し。生後第一回の沐浴に際しては、新生児の身體は血液粘液又は胎脂等を以て汚され居るを以て、最も可嚙に洗除す可し。胎脂は時として夥しく皮膚に附着し、只洗拭したるのみにては容易に去り難きことあり。此の如き場合には、「ワセリン」又は「オリーブ油」を以て拭除す可し。石鹼は普通用ひざるも可なり。沐浴の時間は永きに失す可らず。十分乃至十五分を以て充分なりとす。

沐浴後の處置

**沐浴後の處置** としては、豫め充分乾燥せしめたる西洋手拭(湯上げ)の上を受け、別に用意せる乾燥せし柔軟の小布片を以て、充分可嚙に皮膚

及び皺壁間の濕潤を拭ひ去る可し。否らざれば往々糜爛を生ずる事あり。又頸部、腋窩、股間等には、亞鉛華澱粉を撒布し、充分乾燥せしむ可し。第一回の沐浴に際しては、能く兒體を検査し、創傷、骨傷の有無、或は畸形、殊に肛門又は腔口の閉鎖等の存否を確診するを要す。若し僅にても異常を發見せる時は、直にこれを母に告ぐる事なく、密かに家人に談じ、速に醫治を受く可し。次で臍帶斷端の處置を施し、豫め温め置きたる衣服及び襪襪を纏絡して、床中に臥せしむ可し。

第三 全身の清潔法

全身清潔法

全身の清潔法

は、小兒を健康に成長せしむるに必要にして、日々入浴は勿論、衣服、臥床等の清潔法を怠る可らず。殊に小兒は大小便の排泄頻々なるを以て、身體不潔に陥り易く、爲に糜爛等種々の皮膚病に罹るもの多ければ、二三時間毎によく注意して検査し、若し汚穢せる時は、毎回可嚙に拭除したる後、亞鉛華澱粉を撒布し、襪襪及び濕潤せる衣服を

取り去り、乾燥して温暖なるものと交換す可し。

**冷水にて全身を拭ふの法** は、小児に應用す可からず。學齡に達する頃より行ふを可なりとす。

**小児の室** は、清潔温暖にして、光線の十分透入し、明るき室を撰び又空氣の流通をよくする様心掛く可し。

#### 第四 衣服

衣服

**小児の衣服** は、大人と同じく、寒暑に對する保護を目的とすれば、氣候の寒暖に依りて、適當のものを着せしむ可し。古來我國に於ては、寒暑に拘はらず赤兒に多くの衣服を着せしむる習慣あり。これが爲、反つて温暖に過ぎ、發汗せしめ、寒胃に罹り易からしむ。其の他汗疹を生じ、皮膚を繊弱ならしめ何等得る所あるなし。然りと雖、小児の皮膚を鍛練する目的を以て、薄衣を取らしむるも誤れり。元來小児は繊弱なるものなれば、決して鍛練す可きものにあらすして、適當に保護す可きものなる事を忘る

可からず。否らざれば、却つて感冒にかゝり、肺炎等を誘發して、不測の災に陥ることあり。氣候變換の際には、少しく暖に過ぐるを程度とす。

小児は大人と異なり、身體の發育す可き時期なるを以て、衣服はなる可く寛やかに、大きく仕立てたるものを着用せしむ可し。即ち胸部及び腹部は、衣服にて被包するを要するも、其の呼吸を障礙せざる様なす可し。餘りに紐を緊く締め、又は窮屈なる衣服を着せしめ、手足の運動を妨げざるやうすべし。但し彼の西洋風の衣服は、日本の家屋にありては不適當ならん。

我國の風俗として、哺乳兒に限り、所謂茜色の産衣を着せしむるも、切て着色せる衣服は、小児の繊弱なる皮膚を刺戟して有害なれば、白金巾等を可なりとす。綿布類もよろしからず。衣服の表は、何等の模様あるものを用ふるも妨げなし。要するに、小児の衣服は、軽く、暖く、度々の洗濯に耐え得るものを選ぶ可し。

**小児の頭部** は、寧ろ全く被はざるを可とす。否らざれば、反つて

衣服の地色と材料

頭部の皮膚を繊弱ならしめ、感冒に罹り易からしむる素因をなす。然れども夏期、又は冬期の外出に際しては、軟くして軽き、空氣の流通よき帽子を用ふ可し。

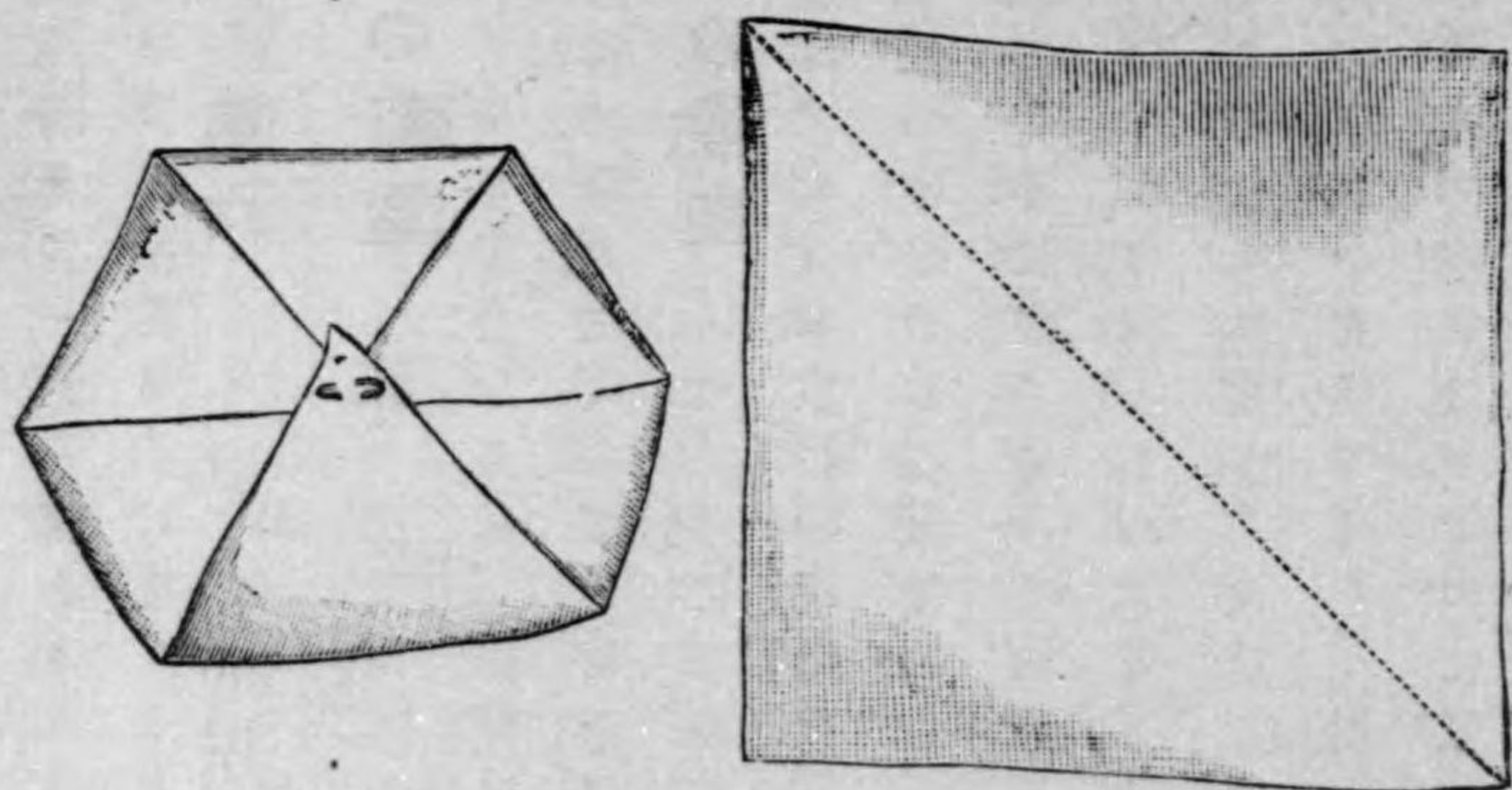
### 第五 襦袢

**襦袢** は、我國古來よりの習慣として、古き衣服を解きたるものを用ふるも近來新らしき布を用ふるの習慣となり來れる如し。これ決して惡しき傾向にはあらざるも、古き衣服必ずしも用ひ得可からざるにあらず。新しき布は各種の有害なる晒粉、又は白粉を附着せるを以て、充分に洗濯したる後ならざれば、小兒の皮膚を害する事あり。古き衣服にても充分洗濯たる後、一度充分に熱湯中に煮沸消毒せるものならば、使用して可なり。否反つて尿の吸収の工合よろしく、且つ布面滑澤にして小兒の皮膚を損する恐れなく、寧ろ新しきものに勝る點あり。

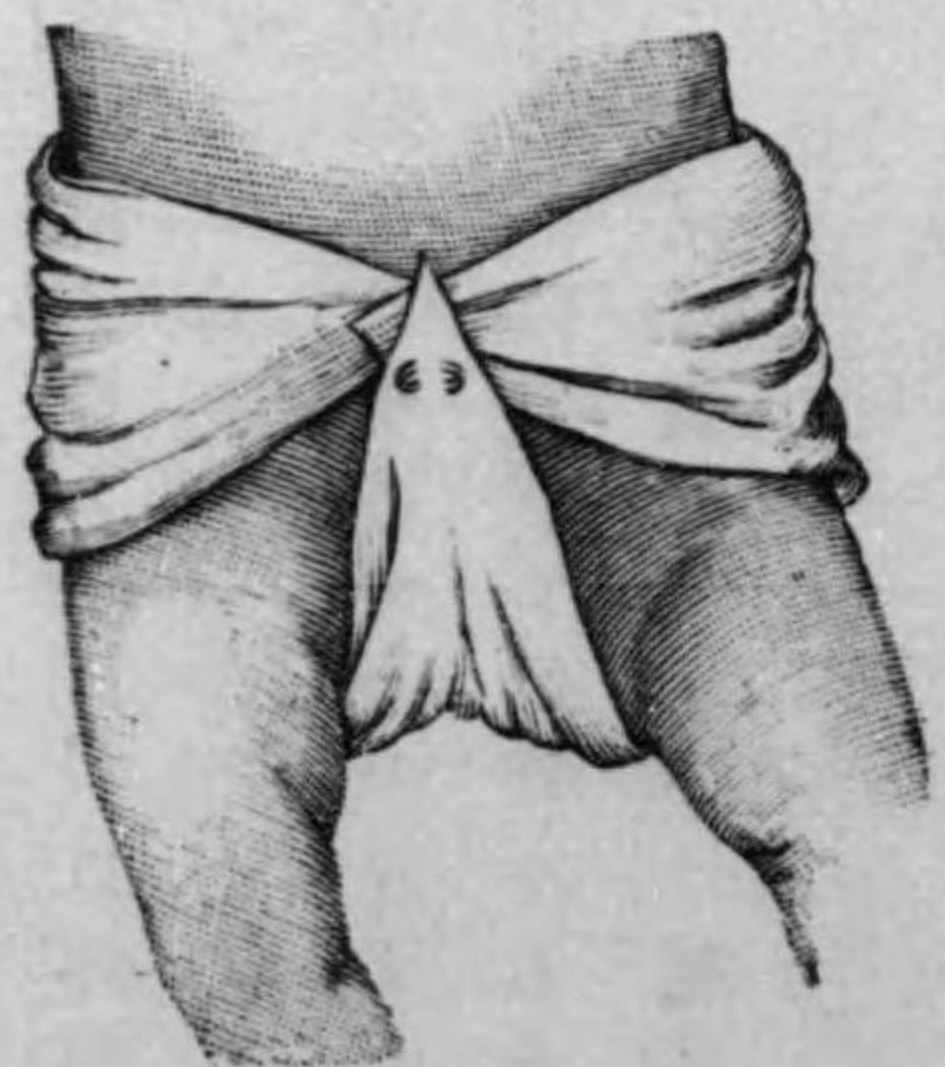
**襦袢の形** は、日本にては長方形のもの多く、西洋にては三角形のもの

第百六十六圖

イ



ロ



三角襦袢

のを用ふ。兩者各一利一害あり。各好む處に従ふ可し。

### 第六 小兒の部屋

小兒の部屋

小兒の部屋は、冬は南向の日當りよく、空氣の流通佳良なる所を撰ぶ可し。最も完全なるは、椽側に二重の硝子戸を締め、戶外の寒冷なる空氣の直接に室内に入らざる所を良とす。

室内の温度

室内の温度は、冬にありては華氏五十度乃至六十度位になすを良とす。然れども日本家屋の構造は、暖室に不便にして、戶外より直接に寒冷にして且つ乾燥せる空氣侵入し、爲に小兒の氣管支粘膜は刺戟せられて、氣管支加答兒等に侵さるゝもの頗る多し。

暖室器

暖室器には種々あれども、日本室に適するもの少なし。普通廣く用ひらるゝものは火鉢なり。火鉢を用ふる時は、よく赤熱せる炭火を用ひ、時に室内の空氣を交換す可し。但し直接戶外に面せる障子を開放する時は、寒冷なる戶外の空氣は、室内に氣流をなして流入するを以て、間接の換氣

臥床

### 第七 臥床

小兒の寢床

法を採る可し。日本家屋の構造は、上記の如く不完全なるを以て、新生児及び乳兒にありては、嚴冬中は湯婆を用ふるの必要ある可し。室内の温度上昇する時は、空氣乾燥するを以て、これに對する注意を要す。否らざれば、往々小兒の氣管支粘膜を侵さるゝことあり。最も輕便なるは、火鉢上に鐵瓶又は金盞を掛け、絶えず水蒸氣を發散せしむるにあり。夏にありては、廣く涼しく、且つ空氣の流通佳良なる室をよしとす。而して強き光線の射入を避け、分曉後一乃至二週間は、多少薄暗くするを要す。但し漸次明るき室に變更す可し。

小兒の寢床

は、軽く暖きものを撰ぶ可し。毛織物最も佳良なれども、木綿にても清潔にして軟かきものを用ふれば可なり。小兒、殊に新生兒の身體は、甚だ纖弱にして、且つ冷却し易きが故に、夏期を除くの外、



枕子

冬期にありては、湯婆を入れ、充分に保温す可きこと前項述べたる所の如し。炬燵は有害なるを以て用ひざるを可とす。

枕は、餘りに細く且つ高きものは宜しからず。内容には、羽毛又は綿の類を入れ、軟きをよしとす。而して枕を用ふるには、稍頸部の尖端に當つるを避く可し。否らざれば、爲に頸部は前屈して、呼吸を障礙することあり。注意すべし。

夜具枕等は、時々日光に曝すのみならず、又よく洗濯して、常に清潔を保たざる可からず。

### 第八 睡眠

健康なる新生児の睡眠は、深くして安静なり。哺乳時を除く外、常によく睡眠するものなり。此の睡眠は兒の發育に極めて必要なるものなるを以て、よく注意してこれを妨げざる様なす可し。故に、哺乳後は直に安静に臥床に睡眠せしむ可し。若し哺乳後、直に兒の身體を動搖せしむる

睡眠時間  
年齢

が如きことあらば、忽ち吐乳するのみならず、繊弱なる小兒の腦を刺戟して、神經過敏に陥らしむる恐れあり。但し早産兒は、過度の睡眠に耽るものなるを以て、哺乳時には覺醒して哺乳せしむ可し。

小兒の睡眠時間 は、年齢に依り一定せず。新生児にありては、哺乳時を除く外は、常に睡眠せるも、發育と共に漸次減じて、一年の終には

平均十六時間、二年の終には平均十二三時間なり。

小兒を臥床に平臥せしむる期間は、小兒の強弱に依りて一定せざれども、通常生後約三四ヶ月とす。此の頃に至れば、兒は臥床上に安逸を貪るを欲せず、他人の腕に抱かれん事を望む可し。これ自然の要求にして、強ひて兒の要求に戻りて臥床に平臥せしむるは、心身の發育上害あつて益なし。

### 第九 啼泣

小兒は、分娩後直に高聲を發して啼泣するものなるも、暫時にして睡眠し、六乃至十時間の後覺醒し、再び啼泣す。爾後健全に發育する者は、空

啼泣

腹時の外啼泣すること稀なり。若し啼泣する時は、襦袢の汚れたるか、衣服の窮屈なるか、腹痛其の他の疼痛ある場合なり。故によく其の原因を探り、注意を怠るべからず。

小児は習慣に陥り易きものなるを以て、啼泣する毎に抱き上げ揺り動かして寝ねしむる時は、母、乳母等は晝夜の別なく、啼泣する小児を抱きて寝ねらしめざれば、安静なる事能はざるに至り、其の困難甚しきのみならず、小児の發育を障害すること亦少しとせず。小児啼泣すれば、直に空腹なる故なる可しと想像するは、餘りに單純早計なる考と云はざる可からず。啼泣毎に哺乳せしむる時は、過飲の爲、胃腸を害し、延いて他の諸病を患ふるに至ることあり。小児啼泣の場合は、猥りに身體を動揺し、又は哺乳せしむることなく、能く其の原因を探究し、其の原因するものなきを確めたる時は、啼泣する儘に放置す可し。啼泣する時は、強く深呼吸をなすを以て、血行の循環を佳良ならしめ、却て小児身體の發育に利益ありとす。

### 第十 哺乳

新生児第一回の哺乳は、敢て急ぐの要なし。母乳の分泌し来るを待ちて與ふるも可なり。母乳の分泌は、分娩後大抵兩三日中に始まるものなれば、生後兩三日中に第一回の哺乳をなし得れば可なり。但し時として、分娩後三乃至四日を経過するも乳汁の分泌開始せざる場合あり。然る時は、猥りに不適當に稀釋したる牛乳等を與ふる事なく、一應醫師に相談し、指揮を受くるをよしとす。

母乳の分泌開始に至る迄は、乳兒の渴を醫し、水分の缺乏を補はんが爲に、白湯、番茶、又は僅に甘味を付したる湯を適宜與ふ可し。甘味を付するには、「サツカリン」を用ふ可し。砂糖は往々害あり。かくの如くして、兩三日間母乳の分泌を待たば、殆んど必ず母乳は分泌を開始するものなり。第一回の哺乳に、煮沸したる牛乳等を與ふるの害は、犢に依りて實驗せられたり。注意す可き事なり。

### 第十一 運動及び外出

外出の時期

初めて乳児を外出に伴はんとするには、温暖の時に於ては、分娩後一乃至二週間を経過すれば害なし。寒冷の時に於ては、生後少なくとも三乃至四週間を待たざる可からず。而も能ふ限り、風なく暖かき日を選び、朝夕寒肝要なり。一日の内に於ても、午後二乃至三時の日盛りを利用し、朝夕寒冷の度強き時間を避く可し。夏期はこれに反し、午後二乃至三時の強烈なる光線を避け、午前十時前後より正午頃迄を可とす。

寒風吹き荒む日と雖、充分に衣服を纏ふ時は害なしと考ふるは誤れり。乳児の繊弱なる呼吸器粘膜は、直に寒冷の空気に侵され、咽喉加答兒、氣管支加答兒等の呼吸器病を發するに至るものなり。

又凡て、激烈なる運動は乳児に害あり。頭部を甚しく動揺せしむること最も不可なり。乳母車の如きも、能ふ可くんば生後一ケ年間は用ひざるを可とす。

乳母車

乳兒營養法

### 第二章 營養法

乳兒の營養法を分つて三種となす。

- 一 人乳、即ち母乳、又は乳母乳を以てする天然營養法、又は自然營養法。
- 二 獸乳、又は穀粉類を以てする人工營養法、又は不自然營養法。
- 三 人乳及び他の營養品を併用する混合營養法。

これなり。

右の内、天然營養法は最も優越したる完全のものなるは今更喋々を要せず。即ち人工營養兒の死亡數は、天然營養兒の死亡數に數倍し、其の罹病數も亦天然營養兒に比して頗る多大なり。

左の表を見れば、蓋し思半に過ぎん。此の表は出生兒一萬人中の死亡者なり。

年 齡	母乳營養兒死亡數	獸乳營養兒死亡數
出生より一箇月	二〇一	一一二〇
一箇月乃至二箇月	七四	五八八
二箇月乃至三箇月	四六	四九七
三箇月乃至四箇月	三七	四六五
四箇月乃至五箇月	二六	三七〇
五箇月乃至六箇月	二六	三一
六箇月乃至七箇月	二六	二七七
七箇月乃至八箇月	二四	二四一
八箇月乃至九箇月	三〇	二一三
九箇月乃至十箇月	三〇	一九一
十箇月乃至十一箇月	三一	一六八
十一箇月乃至十二箇月	三九	一四七

かくの如く人工營養兒の死亡率は、天然營養兒に比して甚だしく大なり。これ人乳は乳兒に對して、獸乳其の他人工營養品を以て代用し得ざる、特殊の優越せる諸點を有するを以てなり。何となれば、母乳は同じく人體よ

り分泌せらるる營養品なるを以て、乳汁中に含有せらるる各營養素は、其の性質に於ても、其の分量に於ても、吾人々類の乳兒を營養するに最も適當せる特長を有せるや勿論なり。

ホルデー  
ヤングーの  
試験  
抗毒素の  
移行  
異

乳汁分泌量

今吾人は、人乳を始め各種の獸乳を採り、これを試験管中に檢するに、其の化學的成分に至りては、其の間餘りに甚敷差異を發見する事能はず。然るに一度これを生物學的に試験する時は、乳汁中の營養素特に其の蛋白質の如きは、各種全然相異なるものなるを發見す可し。これ有名なるホルデーヤングーの試験なり。これに依りて、人乳は人類の乳兒に向つては同種性食餌として働らき、他の獸乳は、凡て異種性食餌として働らくものなることを了解すべし。人工營養法の、天然營養法に劣る諸點甚だ多し、詳細は後章に於て述べ可きも、其主要なるものは、實に左の二點に存す。即ち抗毒素の移行及び乳漿の差異これなり。

### 第一 乳汁に就て

乳汁の分泌は、往々妊娠の末期に於て、已にこれを認め得ることあるも僅少に止まる。而して相當量を分泌するに至るは、分娩後三四日を

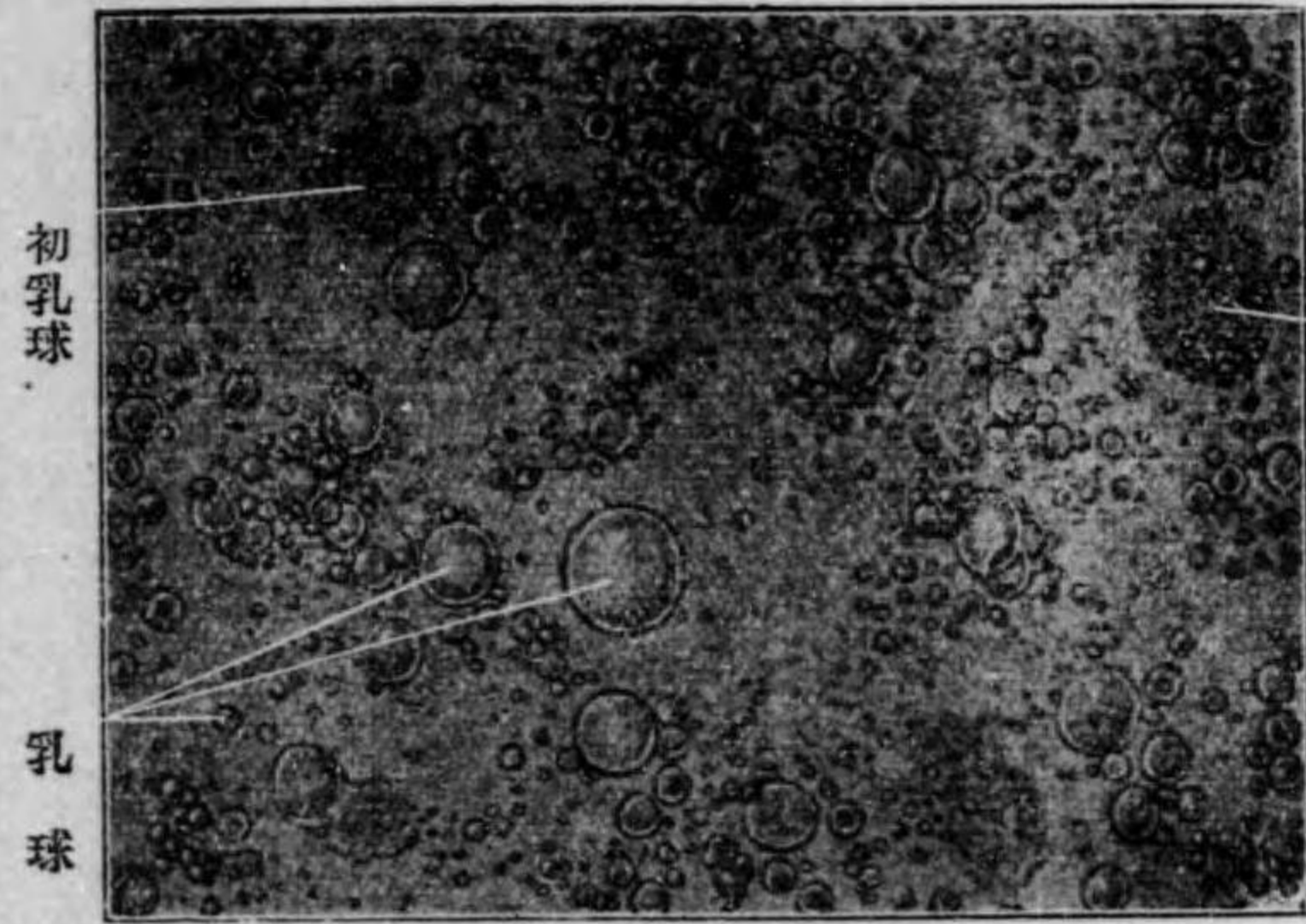
通例とす。乳汁の分泌は、一つに哺乳の刺激に依るものなるを以て、分娩後引き續き授乳する時は、乳汁の分泌は益々増加す可きも、若し授乳を中止する時は、數日の内に其の分泌量は

止する時は、數日の内に其の分泌量は頓に減じ、遂に分泌を中止するに至る可し。又授乳を繼續するも、分娩後十ヶ月乃至一ケ年に至れば、自然に其の分泌量を減じ、遂に中止するに至るものなり。

初乳は、分娩直後に分泌せらるる黄色粘稠の乳汁にして、熱を加ふる時は容易に凝固す可し。これアルブミン及び「グロブリン」と稱する蛋白質の一種を多量に含有するを以てなり。初乳の分泌は、分娩後四日乃至一週日に至

初乳

圖七十六百第



見所的鏡微顯乳初

る。これを顯微鏡下に檢する時は、無數の大小異なる乳球の外、多數の特に大なる桑核様の球狀體を發見す可し。これを初乳球と稱す。これが本態は、他の乳球と同様に一種の脂肪球なるも、唯多數の細小なる脂肪滴を含有せる白血球なるを異とす。かゝる初乳球は、分娩直後に於ては多數存在するも、漸次其の數を減じ、遂に普通の脂肪球のみを含有せる永久乳に移行す。

初乳球なるもの成立に關しては、古來幾多の説あるも、現今にては過剩の脂肪を淋巴道に依りて運び去らんとする白血球の變態に外ならずとの説最も有力なり。即ち此の初乳球は分娩後の初乳時期に出現するのみならず、他の凡ての乳汁鬱滯の時期に於て、常に出現し來るものなり。

**初乳の成分** は、脂肪の含有量甚だ不定にして、一般に蛋白質の含有量多く、殊に「アルブミン」及び「グロブリン」の含有量大なり。其の成分の分解表は左の如し。

初乳成分々  
拆表

乾燥成分	灰分	糖	脂肪	窒素	分
一六・〇四	〇・四八	四・〇九	四・〇八	〇・九二	二六乃至五一時間
一四・一二	〇・四一	五・四八	三・九二	〇・五〇	五六乃至六一時間
一一・七九	〇・一九	六・八一	三・三一	〇・二七	六〇乃至一四〇日數

初乳の乳兒に對する影響に關しては、古來僅微の下痢作用ありて、胎糞を排出する効あるのみなるが如く説かれしも、近時或學者の研究に依れば、滋養分は永久乳に比して甚だ多なるを以て、少量の哺乳に依りて、猶且つ相當量の營養價を攝取し得べく、分娩後數日間乳兒の哺乳力僅少なる時期の營養料として、誠に意味深きものなりと云ふ。

永久乳  
乳汁の成分

とは、乳汁が初乳の性質を帯びざるに至りしものを云ふ。  
左の表に於て明かなり

ザイツ表

營養素	蛋白質		脂肪	糖	鹽類
	カゼイン	アルブミン			
人乳	〇・五布仙	〇・五布仙	四・ガ布仙	七・〇布仙	〇・二布仙
牛乳	三・〇布仙	〇・三布仙	三・四布仙	四・四布仙	〇・七布仙
山羊乳	三・八布仙	一・二布仙	四・〇布仙	四・六布仙	〇・八布仙

堀内松五郎の本邦婦人の乳汁に就き分析したる表は左の如し。

- 蛋白質 一・三四布仙
- 脂肪 二・九八布仙
- 糖 六・九七布仙
- 灰分 〇・一六布仙

乳漿

とは、乳汁中の蛋白質カゼイン及び脂肪を除去したる殘餘の液を稱するものにして、即ち含水炭素、可溶性蛋白質及び鹽類を含むものなり。

(イ)蛋白質 乳汁の蛋白質は、主として「カゼイン」と稱する蛋白質より成り、其他「アルブミン」及び「グロブリン」の少量を含有す。「カゼイン」は、磷を含める不溶性の蛋白質にして、「アルブミン」及び「グロブリン」は可溶性の蛋白質なり。

ザイツ氏乳  
汁成分表

乳漿  
蛋白質

今乳汁中に酸或は「ラ」酵素を入るゝ時は、牛乳にありては、粗大強固の「カゼイン」凝塊を生じ、人乳に於ては、微細軟弱の「カゼイン」凝塊を生ず。又試験管内に於ける消化試験に於ては、牛乳「カゼイン」は容易に消化せざるも、人乳は消化甚だ容易なり。古來此試験を以て、人工營養の天然營養に及ばざる主因となしたるも、人體内に於ける實際は、必ずしも此試験管内の状態と同じからざるが如し。而して「カゼイン」は乳汁の種類を異にするに従ひて、生物學的には勿論、化學的にも差異あるものとす。

含水炭素

(ロ) 含水炭素 は、人乳に於ては獸乳に於けるよりも多量を含有す。而も其の種類は何れの乳汁を問はず同一のものなり。

脂肪

(ハ) 脂肪 は、乳汁の種類に依り、其の成分及び含有量共一定のものにあらず、又時期に依りて、同種の乳汁に於ても異動あり。人乳の脂肪の如きも、乳汁分泌の初期に於ては、脂肪に乏しく、時間を経るに従ひ、漸次其の量を増加するものなり。又同一體より分泌する乳汁に於ても、朝夕に於て、其の含有量同一のものにあらず。

鹽類

(ニ) 鹽類 の含有量の多少は、生體の生長に大なる關係を有するが如く、生長速かなる獸類の乳汁程、益々多量の鹽類を含有する傾あり。就中生長に必要なものは、磷及び石灰にして、骨の主要なる成分をなす。獸乳は一般に人乳よりも鹽類の含有量豊富なり。

醱酵素

(ホ) 醱酵素 は、有力の成分の一つとせらるゝに至れり。而して、これ等醱酵素は

ハプチン

凡て熱に對して甚だしく不安定のものなるを以て、彼の牛乳を煮沸消毒する時は容易に是等醱酵素の分解を來すものなり。今主要なる醱酵素の二三を擧げん。即ち蛋白質、脂肪及び含水炭素分解に必要な醱酵素及び酸化還元を營む醱酵素は皆必要なものなり。

(ヘ)「ハプチン」類抗體及び抗毒素等の含有も亦注目す可き必要條件なり。即ち望扶斯又は實扶的里亞等の如きは、母體の罹病と共に抗毒素を乳汁中に分泌し、これを飲用せる乳兒に對し、該病よりこれを保護し得可し。實扶的里亞血清の如きも、牛乳中に混じて飲用せしむるも、何等効果を生ずる事なけれど、母體に注射する時は、抗毒素は乳汁中に分泌して乳兒を保護し得可し。これ等も人工營養が天然營養に及ばざる點なり。

牛乳の撰擇及び貯藏上の注意

牛乳の撰擇及び貯藏上の注意 として必要な點は、第一健康なる牛乳より可及的清潔に搾取したるものを必要とするは勿論、成る可く多數の牛乳より得たるものをよく混合し、各營養素の含有量を平均したるものにして、且つ搾取後長時間を経過せざるものを飲用せざる可からず。何となれば、牛乳に於ける脂肪等の成分は、各乳牛に依りて一定せず、且つ搾乳より時間を経過するに従ひ、其の中に存在する汚物、例へば糞尿及

び牛毛等に附着せる細菌、及び空氣中より入り來る芽胞の繁殖に依り、酸酵及び腐敗を來す。新鮮なる牛乳と雖、其の一立方仙迷中には、百萬乃至二百萬の細菌を含有し、これ等は皆短時間内に驚く可き多數に繁殖するものなり。故に牛乳を清潔に保たんが爲めには防腐殺菌の方法を講せざる可からず。其の方法は次の如きもの一般に行はる。

- 一 冷却防腐法  
これは氷室等に貯ふるなり。
- 二 高熱殺菌法  
百十五度に熱する事十五分間。
- 三 低熱殺菌法  
七十五度乃至八十度にて、二十分乃至三十分間殺菌す。
- 四 單純煮沸法  
普通一般に行なはるゝ煮沸法なり。
- 五 藥劑防腐法

藥劑を以て防腐殺菌す、近時は過酸化水素を以てする法効果を得たりと云ふ。

要するに、高熱殺菌法は、充分に殺菌の目的を達し得れども、同時に生物學的に絶大の變化を及ぼし、バロー病等を起すの恐あり。低熱殺菌法の如きは、比較的殺菌法に過ぎざるも、普通細菌及び乳酸菌の如きは、全然滅菌せられ、結核菌の如きも十分乃至三十分間にて殺菌し得らるものなり。普通日常には、五分間の煮沸消毒を以て足れりとす。而して一度殺菌したるものは、護謨栓を有する哺乳罐中に入れて冷蔵庫中に貯ふ可し。但し消毒後二十四時間乃至三十六時間を經過せざる内、飲用に供す可し。

左に、ヂヤンチール消毒器及び護謨栓を示す。

ヂヤンチール消毒器及び護謨栓は、左圖に示したる如きものにして、即ち鐵葉製の罐受に純乳又は稀釋したる牛乳を入れ、護謨の蓋を置きたる硝子罐數箇を載せ、其全部を鐵葉製の圓筒形の罐に入れ、其の罐中に凡そ半分計の水を注入して、圓筒を火鉢又は瓦斯「ランプ」の上にて加熱す可し。冬に於ては、沸騰後五分時、夏に於ては十分乃至十五分間にして終る可し。然る時は煮沸の爲、容量増加したる罐中の



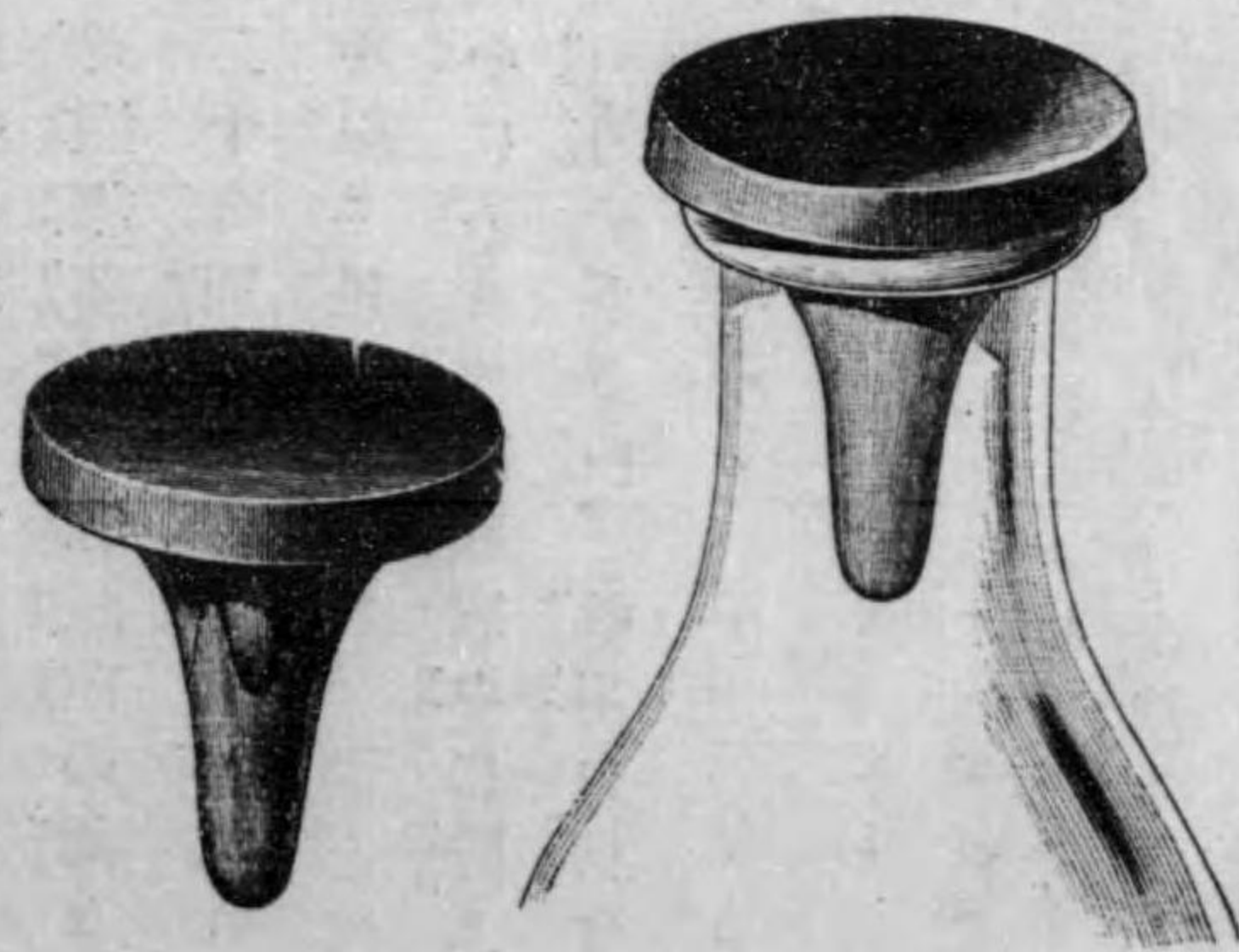
ジヤンチー  
ル氏消毒器

第百六十八圖



ジヤンチールー牛乳消毒器

牛乳は、冷却と同時に、其の容積の減少を來すを以て、罐内に陰壓を生じ、護蓋は固く罐口に附着し、外氣との交通を斷つ可し。故に、この護蓋を取り去らざる間は、罐中の乳汁は殺菌消毒せられたる儘に保たれる。但し永くこれを保存せんと欲せば、更にこれを冷蔵庫中に貯へざる可からず。



ジヤンチールー護蓋栓

牛乳と人乳との差異

化學的成分の差異

細菌の多少

温度の差異

## 第二 牛乳と人乳の差異

人乳と牛乳との差異は、多くの點に於て發見せらる可きも、今主要なるものを擧ぐれば左の如し。

一 化學的成分の差異 獸乳は、人乳に比し、蛋白質及び鹽類多量にして、糖分に乏し。脂肪は、其の含有量大差なし。然も化學的性質に至つては、全く同一ならず、消化力を要する事大なり。

二 細菌の多少 人乳にありては、乳兒は直接に乳頭より哺乳するを以て、乳頭の清潔に保ち得ば、其の乳汁は殆んど無菌的なれども、牛乳は搾取するに際し、清潔を保たれ難き上、搾取より飲用に至るまで、多くの時間を要するを以て、空氣中よりも多數細菌の混入するを免れず。

三 温度の差異 人乳は、母體より直接乳兒に與ふるものなるを以て、其の温度は、常に體温と同一なるも、牛乳に至つては、到底常に體温と同一なる事能はずして、或時は熱きに過ぎ、或時は冷かに過ぎ、以て織

弱なる乳兒の消化器を害するに至る。

酪素及ハプチン類の差異

四 酪素及び「ハプチン」類の差異 人乳にありては、酪素及び「ハプチン」類は充分に其の効果を發揮し得るも、牛乳にありては、加熱消毒するを以て、是等の有力なる作用を消滅せしむ。

其の他、些細なる點に至りては、牛乳の人乳に劣る點甚だ多し。

五 最近諸學者の最も注目せるは、其の乳漿にあり。即ち人

乳漿中のイオン、乳兒の腸上皮細胞に何等の悪影響を及ぼさざるも、牛乳乳漿中の「イオン」は、乳兒腸上皮細胞に甚敷き害を與ふるものなり。此の乳漿の差異は、牛乳が乳兒の消化器を害する最も有力なる一素因なりと云ふ。

### 第三 人乳營養法(天然營養法)

天然營養法は、哺乳兒に對して、實に理想的且つ完全なる當然の營養法にして、就中母の乳房を以てするものを最良とす。萬止むを得ざる場合に

### 第四 授乳

授乳は、小兒の健康上必要なるのみならず、褥婦自己の食慾を増進し、營養を進め、且つ子宮の收縮を促し、惡露の閉止を早からしめ、産褥の経過を佳良ならしむるなど、母體に大なる利益あるものなり。

### 褥婦の授乳

授乳を始むるは、分娩後乳汁の分泌開始するに至らば、何時にても可なり。然も乳汁分泌開始に至るまでの期間は、湯茶又は一萬倍のサツカリン水等を適宜に與へて、水分の缺乏を補給す可し。我國に於ては、俗間四ツ目と稱し、三日間母乳を與へずして、萬久里、三藥湯、及び五香等を與ふることあるも、是等の習慣は、新生兒の纖弱なる胃腸を害し、下痢を來さしめ、往々強度の營養障礙に陥らしむることあり。

授乳

授乳の始

分娩後、時として一日乃至三四日間、母乳の分泌を見ざることもあり。特に、初産婦に此の事多し。かゝる場合に當りて、多くは直に兒の飢餓に陥らんことを恐れ、速に牛乳等を與ふることあるも、これが爲、兒は容易に胃腸を害し、且つ母乳の刺戟薄弱となるを以て、母乳の分泌は益々遅延し、或は時として、全然其の分泌を開始し能はざることあり。故にかゝる場合は、前に述べし如く、直に牛乳等を與ふることなく、白湯又は番茶或は稀薄なる「サツカリ」水等を與へ、兒の水分缺乏を補ひ、徐ろに母乳の分泌を待つ可し。但し此の間絶えず母乳を吸啜せしめ、以て分泌の増進を企てざる可からず。然る時は、殆んど凡ての場合に於て、母乳の分泌を増進し得ざることなし。而もかくの如くして、猶且つ母乳の分泌を得ざる場合は止むなく初めて一定に稀釋したる牛乳を與ふ可し。然れども一方母乳分泌促進の處置は、決して放棄することなく、其の分泌漸次増進するに従ひ、牛乳を與ふる回數を減じ、分泌充分とならば、全く牛乳を廢し、母乳のみを與ふ可し。

哺乳量

母乳分泌不足に際し、各種の催乳薬を與ふることあるも、殆んど効あることなし。只母をして催乳薬を服しつゝありとの感念を有せしむるは、忍耐して哺乳を繼續せしむるに効あり。

○乃至二〇瓦にして、多くも五〇瓦を超過せず。第二日より漸次増量するものなり。

第一日	二〇・一グラム
第二日	一〇・四九グラム
第三日	一八九・五グラム
第四日	二五九・〇グラム
第五日	三〇二・五グラム
第六日	三三一・三グラム
第七日	三六一・三グラム

第一ヶ月以後の哺乳量は、ライヘルに依れば左の如し。

平井博士は、フェールの調査に基き、我邦乳兒の體重に換算して次の數を得たり。

満一箇月	満二箇月	満三箇月	満四箇月	満五箇月	満六箇月
五九・九三グラム	七四・四六グラム	八一・七一グラム	七七・八三グラム	七三・一三グラム	七三・六七グラム
六四・〇〇グラム	七八・〇〇グラム	八二・一〇グラム	八三・八〇グラム	八八・三〇グラム	九〇・四〇グラム

瀬川博士は、自己の小兒に就き、調査して次の結果を得たり。

第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	第八週	第九週	第十週	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	第八週	第九週	第十週								
一七七・〇	四九一・〇	五九七・〇	六六一・〇	六九九・〇	七二五・〇	七四四・〇	七九九・〇	八八一・〇	七七九・〇	七八〇・〇	七三六・〇	八四一・〇	八五〇・〇	二五四・〇	二八一・〇	三〇二・〇	三三五・〇	三五八・五	三九八・五	四〇三・五	四二八・五	四七二・五	四七〇・〇	四七六・〇	四九六・〇	五二六・〇	五三九・〇
一日の哺乳量	體	重																									

授乳の回数と時間 は、一日五乃至八回とし、多くも八回を超ゆ

可からず。晝間は三時間毎に一回、夜間は四時間以上の間隔を置く可し。未熟児の如きは、哺乳力弱きを以て、毎二時間に一回の割にて、少量づゝを與ふるを可とす。

授乳の方法

授乳の方法 授乳するには、最初は兩側の乳房を用ふ可し。然れども、乳汁の分泌増進したる時は、一側の乳房のみを用ひて、一回の授乳に當つ可し。是最初の間は、乳汁の分泌量甚だ少量なるも、後に至らば一側の乳房の分泌量にて充分なるのみならず、萬一不足する場合ありとも、一側の乳房を完全に吸ひ終らずして、他側の乳房を用ふる時は、遂に乳汁の分泌量は漸次減少するに至る可し。但し未熟児の如きは、哺乳力弱きを以て、兩側の乳房を用ふる必要あり。然もかゝる場合は、乳汁の分泌量漸次減少するを普通とするを以て、傍ら他の健康兒をして強く吸啜せしめ、乳汁の分泌増進を圖らざる可からず。

今右方の乳房を以て授乳せんとする場合には、母は右側を下に臥し、右の肘にて上半身を支へ、其の前膊を以て小兒を抱き、豫じめ清潔になした

授乳婦の乳房と手指

左の示指と中指とを以て、乳房を摘み、小兒の口内に含ましむ可し。小兒哺乳の際、乳房を以て其の鼻孔を塞ぎ、呼吸を妨げざる様注意す可し。左側の乳房を授けんとする時は、左側に臥せしめ、右方に於けると同様に可し。分娩後一週乃至十日間は、坐して授乳せざるを可とす。これ蓋し、子宮甚しく壓下せられて、其の下垂又は脱出を來す虞あるを以てなり。授乳婦は、哺乳せしめつゝ睡眠するが如きことある可らず。然らざれば、往々過つて乳房を以て鼻孔を壓し、窒息死に陥らしむることあり。

授乳婦の乳房と手指 授乳の際、乳頭は直接に小兒の口中に入るを以て、乳房及び乳頭、乳暈等は清潔にすべし。授乳の際は、常に乳頭及び乳暈の部を微温湯と、石鹼とを以て清潔に洗滌し、或は二乃至三布仙の硼酸水、或は七五乃至八五布仙の「アルコール」にて清拭すべし。授乳終らば、又此の法を反覆し置く可し。乳房を不潔ならしむる時は、小兒の口腔、及び胃、腸病を誘發せしむることあるのみならず、乳房の糜爛、乳腺炎等を起し、授乳を廢するの止むなきに至る可し。

乳頭と乳暈

乳頭及び乳暈は、菲薄なる皮膚を以て被はるゝが故に、損傷し易く、其の損傷より種々の細菌侵入し、乳腺炎等を起すことあり。故に、妊娠中より心掛け「アルコール又は硼酸水」を以て、乳暈及び乳頭の部を清拭し、其の部の皮膚を鞏固ならしめ置くこと必要なるのみならず、授乳前後には、よく乳頭の部を清拭し、且つ軟き布片又は綿花を以て乳頭を被ひ、これを保護し置く可し。

乳頭の損傷

乳頭の損傷 乳頭に龜裂、又は糜爛を生じたる時は、授乳後一布仙の「リゾホルム」を以て洗滌し、硼酸軟膏又は「オレフ」油を塗布し、更に授乳時に至り、之を洗ひ去る可し。若し糜爛甚しければ、授乳を廢し、硝酸銀液を塗布し、速かに、醫治を乞ふ可し。哺乳作用の爲、疼痛甚しき時は、吸引器を用ひて吸乳せしむ可し。

乳腺炎

乳腺炎 常に乳頭の清潔に注意し、これを豫防す可きこと勿論なるも、既に乳腺炎を發したる時は、授乳を禁じ、冷罨法、又は氷罨法を行ひ、提乳帶を以て乳房を釣り舉げ、速に醫治を乞ふ可し。既に化膿して切開を受

提乳帶

けたるが如き場合には、乳汁中に膿を混するものなれども、兒に與へて何等の障礙なきのみならず、乳房の血液循環を佳良ならしめ、従つて乳腺炎の治癒に好影響を與ふるを以て、何等顧慮することなく、授乳するを反つて利なりとす。

小兒口腔内の清潔法

小兒口腔内の清潔法

從來の慣習に依る時は、小兒口腔内の清潔法は、甚しく積極的なりしも、近時諸學者の説は、最も消極的となり、唯不潔ならしむる事を避くるに止まり、從來の如く硼酸水に浸せる「ガーゼ」等を以て、口腔内を拭除するを欲せざるに至れり。若し強ひて口内の拭除を欲する時は、綿花に硼酸水等を浸し、極めて靜に弱く拭ひ、決して暴力を用ふ可からず。否らざれば、爲に口腔粘膜を損傷し、反つて鵝口瘡菌等の附着繁殖を見ることがあり。

鵝口瘡菌

元來母乳は無菌のものなるを以て、乳頭の清潔だに保たるゝを得ば、哺乳に依りて何等不潔物の口中に進入する恐あることなし。不潔なる硼酸水又は「ガーゼ」或は綿花等を用ひ、若くは拭者の手指不潔なる時は、反つて清

乳汁の分泌  
減少と乳房  
緊満に對する  
緊満に對する

潔なる小兒口腔内を不潔ならしむる虞あり。猥りに行ふ可きことならず。  
**乳汁の分泌減少及び乳房緊満に對する處置** 乳汁の分泌時として充分ならざることあり。然る場合には屢々兒をして哺乳せしめ、乳房を刺戟し、其の分泌増進を圖る可し。乳汁の分泌増進を來す可き唯一の方法は、單に乳房の刺戟、即ち兒の強き哺乳作用にあり。故に忍耐して哺乳せしむる時は、遂に目的を達せずと云ふことなし。

分泌減退の  
豫防

殊に注意すべきは、未熟兒の如く體力弱くして、吸力充分ならざるものにありては、其の刺戟亦弱きを以て、初より乳汁の分泌不足するか、又は初期に充分なる分泌あるも、漸次分泌の減少を來す場合あり。然るに、未熟兒の如き體力薄弱なる兒程、益々母乳の必要を感ずるものなるを以て、如斯場合には、あらゆる方法を以て極力母乳の分泌増進、若くは維持に努力す可きなり。即ち他の強健なる兒をして吸吮せしめ、又は吸乳器を以て分泌を促す等の方法を用ひ、注意して分泌の減退を防ぐ可し。  
食物の如何は、乳汁の分泌と殆んど何等の關係なし。故に、強ひて特別

授乳困難の  
場合

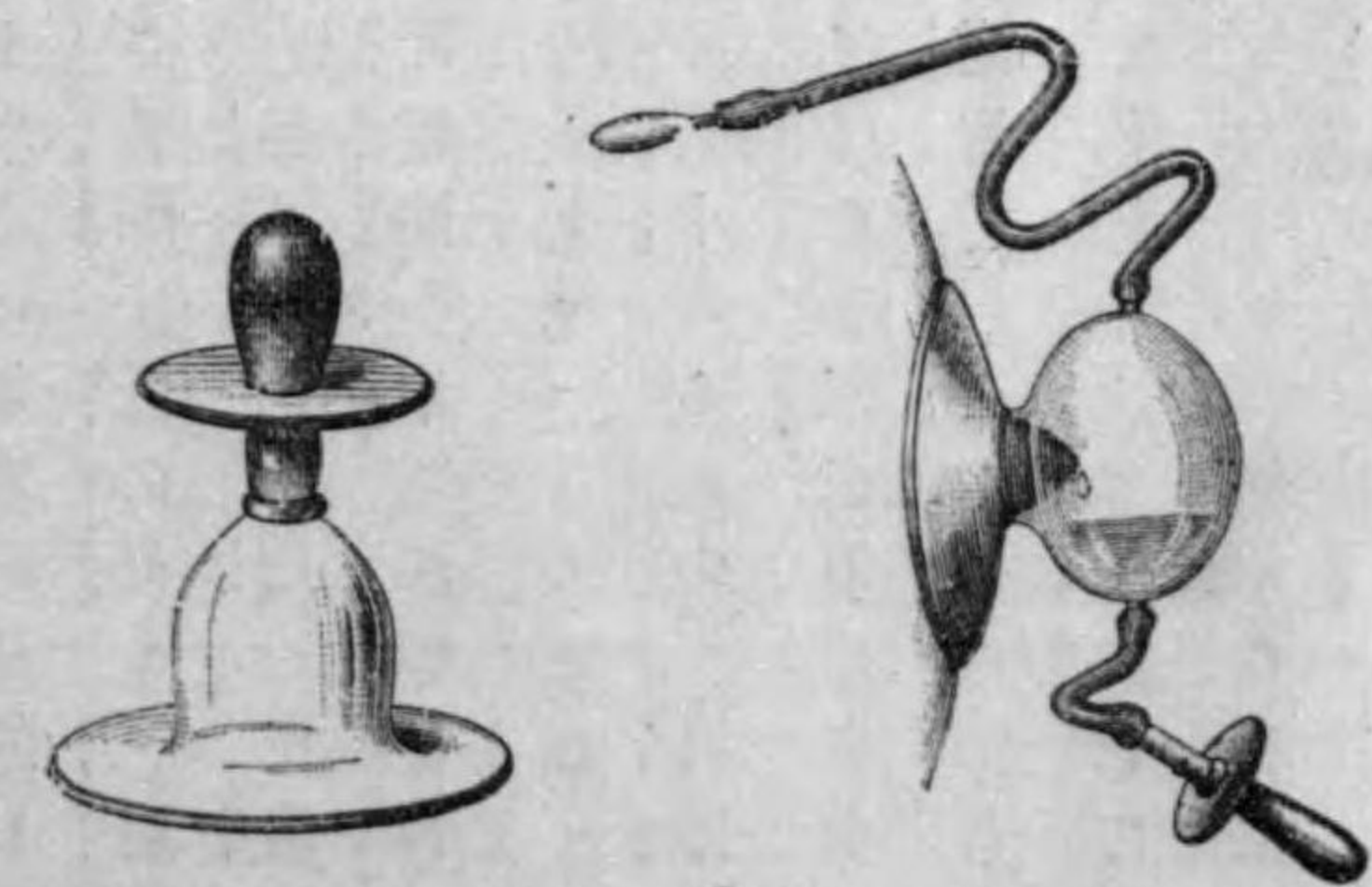
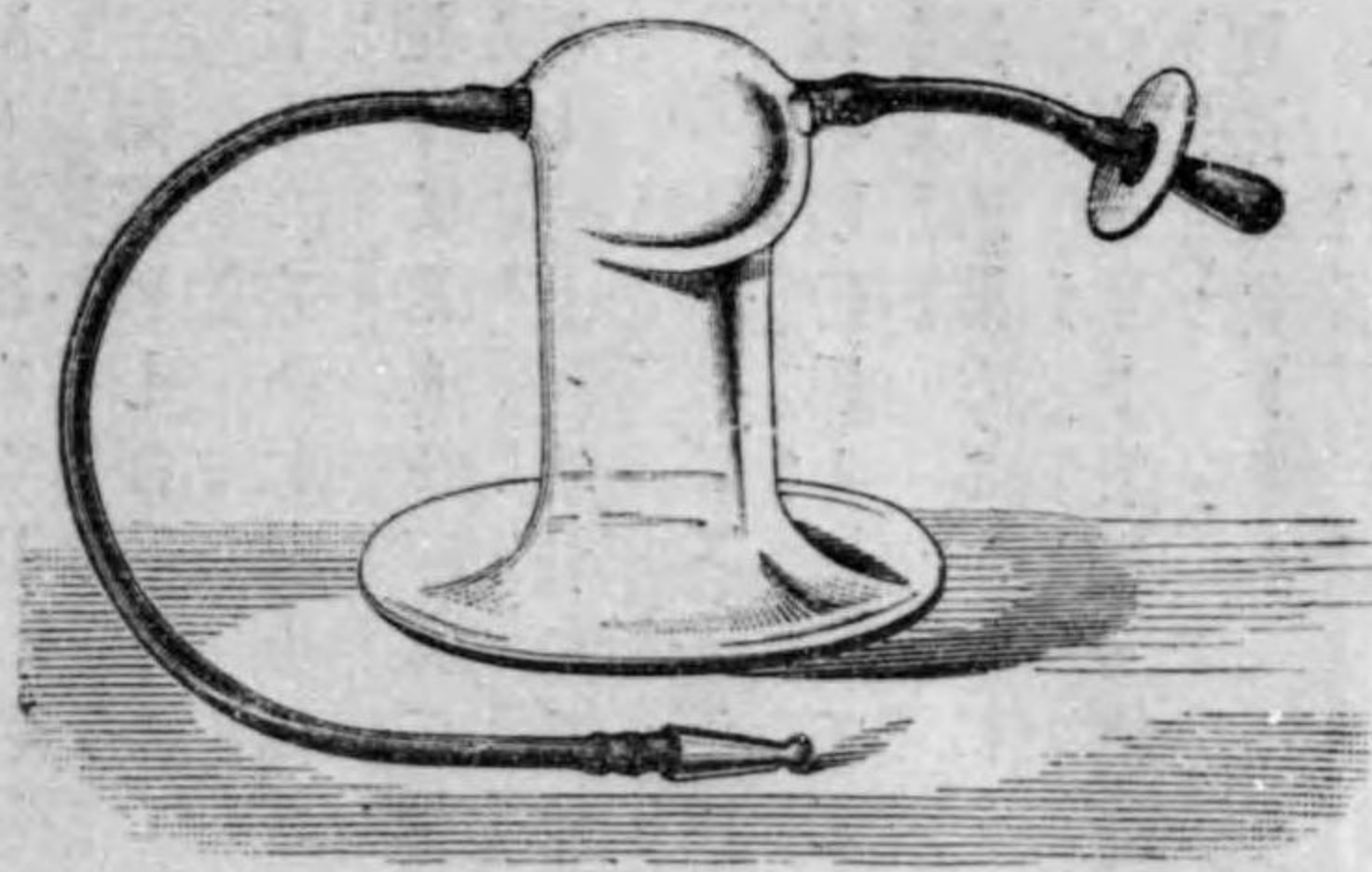
の食物を攝取する必要なし。只注意すべきは、如何なる食餌にても可なるを以て、充分満腹に至るまで飽食す可し。

乳汁分泌量多くして、乳房の緊満甚しく、疼痛を訴ふるに至る時は、飲食物を減じ、綿布を以て乳房を提舉し、其の綿布の兩端は頂部に於て結縛す可し。褥婦若し授乳すること能はざる際、此の如く乳房緊満するときは、亦同様にして妄りに搾り出す可らず。然らざれば反つて乳房を刺戟して分泌を増進する恐あり。其他乳房に冷罨法、氷罨法等を行ふときは、其の疼痛を減じ、且つ乳汁の分泌を減少せしむることを得可し。

**授乳の困難なる場合** 乳頭の短小なるもの、乳頭の凹陷したるもの、或は乳頭の扁平にして充滿したるもの、又は乳頭の分裂したるもの、等は、授乳困難なるが故に、適當の處置を爲さざる可からず。

若し、斯の如き乳頭を有する人は、妊娠中より注意して乳頭を牽き延ばし、乳頭の延長に努む可し。斯の如くなすも、猶不充分にして授乳に困難なる時は、吸乳器を以てこれを吸ひ出さしむ可し。

圖九十六百第



器乳吸

小兒口を閉ぢて開かざるか、或は哺乳運動を營まざる時は、下顎を徐々に下方に牽引して口を開かしめ、舌上に乳汁を搾り出すか、又は微温の砂糖水を点滴して哺乳を促す可し。

廢乳

授乳を廢す可き場合

母乳の大切なる所以は、略これを説明したり。故に授乳を廢するは頗る重大なる問題にして、輕忽に斷行す可からず。輕忽に之を行なふ時は、嬰兒の發育を障礙するのみならず、屢々小兒の生命に關する事あり。故に廢乳に際しては、専門醫の指揮を求む可し。俗間に於ける廢乳の原因には、笑ふ可きこと甚多し。授乳に依り母體の衰弱を來し、顔貌を醜ならしむと考へ、又は乳房の弛緩下垂を憂ひて廢乳するものあれども、授乳に依り美貌を損すと考ふるが如きは、眞に杞憂に過ぎざるなり。授乳の面倒を厭ひて授乳を廢する如きは、其の愚及ぶ可らず。又分娩直後に於て、乳汁分泌量の不充分なるか、又は遅延するに依りて、牛乳等を與へ、其の結果廢乳の止むなきに至ることあり。或は一時的疾病の爲、授乳を中止し、後再び授乳せんとする際、分泌不全の爲廢乳するに至ることあり。又一種の理由に依りて、強ひて混合營養を行なはんと企て、果然失敗して遂に廢乳の止むなきに至れるものあり。何れに於ても一つとして廢乳の理由たるものなし。これ等は凡て適當の處置に依りて除



かる可き原因なり。又時として醫師が誤れる診断の下に授乳を禁せらるゝことあり。何れも注意す可きこととす。

母體及び乳兒の各方面より見て、授乳を不可能ならしむる場合多きも、大別して、

- 一 絶對的授乳不能、
- 二 比較的授乳不能、

となすことを得可し。

絶對的授乳不能は、母の死亡せし時にして、又比較的授乳不能の場合多く、大略左の如し。

**一 諸種の重病** 重症産褥性敗血症及び膿毒症、腸室扶斯、猩紅熱、重症丹毒、悪性密尿病、發作頻回なる癲癇、母の脚氣に依り乳兒已に危険の徴候を呈せるもの等、殆んど絶對に授乳を禁す可きものなり。

**二 諸種の熱病** 月經時、肺炎、其の他の急性熱病、腎臟炎、強度の貧血等は、授乳を不可となす人あるも、猶人工營養の危険なるに勝れる

絶對的授乳不能

授乳不能

こと勿論なり。

### 三 母體に結核

ある場合の授乳に關しては、議論猶一定せず、略血、又は熱發を伴ひ、強度の衰弱に陥れる者の如き、咳嗽の甚だしきもの等は、無論授乳に適せざるも、否らずして輕度のものにして、母の體力衰へず、顔貌爽快にして、自覺症狀なきものは、授乳に依りて反つて母體の健康を増進し、其の體重を増加せしむるのみならず、兒も亦これが爲に、後來結核に對する大なる抵抗力を得るに至ると云ふ。然れども、猶全然授乳の不可なるを極論する學者あり。たとへ授乳を廢するにせよ、家豊ならずして、母と乳兒と同棲せざるを得ざる場合に於ては、全く價値なき議論たるを免かれず、何となれば、結核は母子同棲に依りて、傳染の危険、毫も授乳の場合と異ならざればなり。

### 四 乳腺炎

外科的に治療を施されたる後は、授乳せしむ可し。即ち授乳に依り、乳房内の血液循環を佳良ならしめ、炎症の消散を扶け、又疼痛を緩解するの利あり。此の場合膿汁の乳汁中に混じ來るは、何等意に介

乳腺炎

乳嘴裂傷

するに足らず。  
**五 乳嘴裂傷** 哺乳期間、往々乳嘴に裂傷を患ふことあり。疼痛甚しくして、哺乳に堪えざることあり。かゝる時は、吸乳器を用ふるか、又は治療を加へつゝ授乳せしむるも可なり。疼痛堪え難き時は、暫時の廢乳を餘養なくせらるゝことあるも、適當の時機を見て哺乳を再開す可きものとす。

**六 狼咽及兔唇**

これ等の場合にも、哺乳困難なることあり。適當の治療に依りて治癒する場合多し。

**七 鼻加答兒**

の甚しき時も、哺乳困難なることあり。以上は、授乳障礙として認む可きものなるも、成る可く適當の方法の下に、母乳營養に努む可きものとす。

これに反し、遺傳微毒の存する場合に於ては、必ず母乳を與ふことを要す。遺傳微毒兒の人工營養に因るものにして、發育を遂ぐるものゝ僅少なるは、一般に認めらるゝ處なればなり。

授乳婦の攝生

**授乳婦の攝生**

授乳婦も亦、一般健康體の遵守す可き衛生上の注意を勵行す可きは勿論にして、別に何等特別の攝生なし。

授乳婦は、一般に過度の勞働をなして、身體の甚だしく疲勞することを避くると同時に、餘りに安逸怠惰に流れず、甚しき運動の不足を避く可し。精神的興奮は、古來大に誡められたる事なれども、近時の研究に依れば、乳汁の性質及び分泌量に何等著るしき影響を及ぼすものにあらず。神經性の婦人にありては、大なる精神興奮に際して、乳汁の分泌減少し又は閉止を發することあり、これ反射的に乳汁括約筋の收縮し、一時的に斯の如き現象を呈せるに外ならざるを以て、意に介することなく、續いて乳兒をして強く吸啜せしむる時は、乳汁の分泌は、以前と同様の程度に於て再開するものなり。

授乳婦の攝取す可き食物には、何等の制限あることなし。宜しく其の嗜好する範圍に於て、飽食せしむれば足れり。普通の食物中、多少滋養價の多きものを撰ぶ可きは勿論なれども、特別の滋養物のみを撰擇するの必要

なし。古來より酸味ある食物、香料を加へたる食物、青菜、果物等は、授乳婦の食物として多く喜ばれざりしものなるも、現今にては何等の制限を附することなし。食慾不振のものにありては、適宜の香料を加へたるものを用ふれば、食慾を増進する利益あり。又青菜、即ち新鮮なる野菜の如きは、便秘に傾ける婦人には、殊に適當なり。新鮮なる果物を適宜に食する事も亦甚必要とす、授乳婦にして青菜を食する時は、乳兒青便を排出するものなりと考ふるが如きは謬見なり。如何なるものなりとも、過度ならざる限りは禁す可き理由なし。

脂肪多きものを食すれば、母乳中の脂肪を増加して害ありと考ふるも誤れり。母乳の成分、特に其の脂肪の含有量は、個人に依り決して同一のものにあらず、乳汁を検して、其の脂肪の含有量過多なり、又は過少なりとて、其の母乳を不可なりと斷ずるは、甚しき誤謬にして、要するに乳兒の健康如何を標準とするの外なし。

凡て、乳汁は授乳婦の食物如何に依りて、其の成分を甚しく變ずるもの

利乳劑

にあらず。脂肪の如きも、脂肪多き食物を攝取したりとて、さして乳汁中の脂肪量に變化を來すものにあらず。又牛乳、肉羹汁其の他のものを多量に攝取したりとて、決して乳量を増加するものにあらず。

其の他坊間に販賣する利乳劑の如きは、殆ど何等の効なし。「ゾマトーゼ」「サナトーゲン」「ラクターゴール」等、皆一樣にさほどの効あるものにあらず。要するに、唯乳兒の強き吸啜に依るのみ。

近時、「ホルモン」を利用して、乳汁分泌を増進せんと企てたる學者あるも、未だ實用に供し得る程度に達せず。其の他、又健康婦の乳汁を、一〇立方仙迷づと數回皮下に注射する時は、乳汁の分泌を増進し得るものなりとの説をなす學者あり。

授乳婦は、液體の需要を増加するものなれば、湯茶の如き飲料を充分に採る可きは勿論、肉羹汁の如きも、多量に與へて可なり。平素酒を嗜む者にありては、少量の飲酒は害なし。然れども、多量に用ふる時は、「アルコール」の幾分は、乳汁に移行するを以て、乳兒に影響なしと云ふ可からず。

藥物は、特に授乳婦にのみ禁す可きものあらず。沃度、臭素、「サリチル」酸、阿片、莫兒比涅、「アトロピン」等は、乳汁に移行すれども、乳児に有害なる程度にあらず。水銀劑の如きも、乳児に影響せしむる程度は、乳汁中に移行せしむるを得ず。母體に「クロ、ホルム」麻酔を施すも、哺乳兒に害なく、要するに如何なる藥劑にても、適當に用ふる時は、母體、乳兒共に、何等の害を被むる事なし。

月經の如きは、授乳に何等の影響なし、授乳中は通例月經の閉止するものなるか、又は甚不規則となるものなるも、此の際規則正しき月經の存在を見るときも何等の恐ある事なし。

授乳婦にありては、睡眠は甚必要なり。睡眠の不足を來す時は、乳汁の分泌量減じ來る事あるを以て、成る可く充分の睡眠を採るべきなり。

その他、普通一般の衛生に注意するを要すること勿論なれども、授乳中は、特に健康に留意し、若し僅にても身體に異和を感ずる時は、猶豫なく醫師の診察を求む可きなり。

### 第五 乳母の撰定

母親にして、萬止むを得ざる事故の爲に、生兒に授乳し能はざる時は、乳母を雇ふべし。乳母は、母親に代りて生兒を哺育するものなるを以て、第一健康者ならざる可からず。乳汁分泌の豊富なる事も條件の一なれども、殊に體格の強健を以て最も大切な條件とす。乳汁分泌の如きは、人力を以て左右するを得るものなるも、體格不良なるもの、又は已に疾病に罹れるものにおいて、生兒に及ぼす危険甚大なりとす。健康なる婦人にありては、乳汁の成分は、各個人に就て甚しき差異あることなし。故に、乳母の撰定に當りては、乳汁の検査と稱する如きは、第一の條件にはあらず。乳母の攝生法は、授乳婦の攝生法と大差なし。第一にその起居動作及び食物等に急激の變化を與ふるはよろしからず。乳母は多く他の雇人以上に優遇せらるゝ傾きあれども、乳汁の成分は、食物の良否に依り、著しき差異あることなし。故に、乳母が從來食し來りたる程度の食物を飽食せしめ、

乳母が從來生活し來りたる程度の生活状態に於て勞働せしめ、決して飽食安逸ならしむ可からず。

狼りに、乳汁分泌の豊富なる乳母を撰定するに急にして、自己生児の哺乳力の如何を顧みざる結果として、乳汁分泌の過剰を來し、爲に乳汁の停滞を起し、終に分泌不足を將來することあれば、乳母を撰むに當り、乳兒の哺乳力如何を考量すること必要なり。

乳母の撰擇に當りて注意すべき疾病は、結核、梅毒、淋疾、寄生性及び傳染性皮膚疾患なり。但しビルケ―結核皮膚反應陽性の如きは、甚しき價値を有せず、結核の如きは、臨床上已に明かに結核性疾患の存在を認識し得る程度を以て検査す可し。反之、ワッセルマン梅毒血清反應は、必ず行ふ可きものにして、若し此の反應陽性なる時は、決して採用す可らず。但し生児、已に遺傳梅毒を有するものなるに於ては、梅毒を有せる乳母の乳汁は反つて甚有利なり。

乳母の微毒に罹れるや、否やを検するには、乳母の子を見ること必要なり。乳母の兒、已に一箇月以上に及べるものならば、遺傳梅毒の徴候已に發せるを普通とす。

乳母は、分娩直後のものよりも、一二箇月間乳兒に授乳したるものを適當とす。分娩後、一箇年以上を経過したるものは不適當なり。

乳汁の顯微鏡的検査は、さしたる價値を有するものにあらず。彼の乳汁中の脂肪球の大小、及び多少を論ずるが如きは、其の愚及ぶ可らざるものにして、何等の價値あるものにあらず。只乳汁中に、初乳球の有無、及び白血球の存在等を注意すること必要なり。一時授乳を廢せし者にありては、乳汁中に初乳球と同一の乳球を見るものなれば、注意す可し。

臨床的に乳母を検査せんとする時は、第一に乳母の子を検査すべし。其の子にして、生後一乃至二箇月を経過し、而も微毒其の他の徴候なく、營養状態佳良にして、健全に發育せるものならば、其の乳母は理想に近きものなりと云ふを得可し。

生兒已に遺傳微毒を有せるにも拘はらず、これに健康なる乳母を附する

理想に近き乳母

乳母の年齢

が如きは、生児に不利なるのみならず、生児の微毒は、哺乳に依り乳房を介して乳母に傳染するを以て、人道上不都合なる所爲と云はざる可らず。乳母の年齢は、餘りに年若きもの、又は餘りに老年なるはよろしからず。まづ二十歳乃至三十歳のものを適當とす。而も、性質温順にして、清潔を好むものたる可し。

初産婦よりも、經産婦なる時は、凡てに便なるのみならず、乳汁分泌の良否も已に大體の判断をなすことを得るの便ありとす。

### 第六 離乳又は斷乳

離乳と斷乳

生後六箇月乃至八箇月頃に至れば、乳兒は哺乳を好まずして、反つて周圍の人々の食するものを渴望するに至る。此の時期に至れば、已に乳汁以外の食物に對する嗜好の生ぜし證にして、此の時に當り、他の比較的消化し易き食物を與ふる時は、乳兒は大なる喜を以てこれを食し、更に新たなるものを望みて止まず。此の時機に於て、猶徒らに舊慣に拘泥し、新たな

斷乳の方法

る食物に移るを欲せず、依然として乳汁のみを以て哺育する時は、乳兒は貧血となり、皮下脂肪組織の發育不良にして、皮膚の緊張を欠くのみならず。骨格の發育も亦不良なるに至る。故に、一定の時期に達したる時は、猶豫なく斷乳の豫備行爲として、副食物を與へ、漸次斷乳す可し。斷乳の時に關しては、諸説必ずしも一定せざるも、早きは六箇月、遅きも十五箇月以内たる可しと云ふ。大略誕生頃を適當となす可し。但し斷乳の時期、夏季に相當する時は、消化障礙を起す恐あるを以て、少しく繰り上げ、又は延期す可し。

斷乳の方法は、各自任意たる可しと雖、一日適當の時を選び、一回を薄粥又は他の代乳料を用ひ、一回の量百瓦内外たる可し。又薄粥其の他の穀粉製のものに代ふるに牛乳を用ふるも可なり。此の際水飴を以て調味す可し。其の混合の割合は、後章に詳説す可し。

其の他肉汁、又は野菜肉汁等を適宜混和して與ふるも可なり。かくして漸次薄粥より粥となし、副食物として卵黄、魚肉、豆腐等を與ふ可し。

### 第三章 人工營養法

人工營養法

乳兒營養に關しては、從來陳べ來りし如く、母乳又は乳母乳の如き人乳營養の理想的にして完全無缺なるは今更論なしと雖、時として萬止むなき事情の爲、人乳營養を行ひ難き場合あり。然る場合に於ては、止むを得ず他の方法に倚らざる可らず。これ人工營養法にして、決して好ましきことにはあらざれども、其の方法だに宜しきかなひなば、又以て育兒の一方法たるに反かず。

故に、今人工營養法の一般を述べ、以て過ちなからん事を期すると雖、決して好んで行ふ可きの方法にあらざるを知らざる可らず。

#### 第一 人工營養の方法

人工に營養する乳兒と雖、亦天然營養の場合と同一にして、分娩直後には、決して哺乳せしむ可らず。宜しく番茶を薄く煎出せるものに、「サツカ

乳第一回の哺

リンを加味せるもの、又は白湯等を飲用せしめ置き、一兩日の内に初て第一回の哺乳を開始す可し。

一 牛乳の稀釋法 牛乳の滲透壓は、略血液の滲透壓と同一なるを以て、稀釋して用ふるの要なしと云ふも可ならん。又實際に於て、斯の如き主張をなせる學者なきにあらざると雖、他の多數の實驗の結果に徴すれば、猶從來行はれ來りし如き、稀釋せる牛乳を用ふるを以て、最も安全なりとす。

近時最も、普通に行はるゝ稀釋法は次の如し。

新 生 兒	牛乳一に湯三を加ふ
一乃至二箇月	牛乳一に湯二を加ふ
三 箇 月	牛乳一に湯一を加ふ
五 箇 月	牛乳二に湯一を加ふ
七 箇 月	全 乳

又は

一 箇 月	牛乳三に湯七を加ふ
-------	-----------

二	筒	月	牛乳四に湯六を加ふ
三	筒	月	牛乳五に湯五を加ふ
四	筒	月	牛乳六に湯四を加ふ
五	筒	月	牛乳七に湯三を加ふ
六	筒	月	牛乳八に湯二を加ふ
七	筒	月	全乳

右は大體の標準にして、乳兒發育の狀態、季節の如何に依り、多少の斟酌をなすこと最も緊要なり。

稀釋に際し、何を用ひて稀釋に依りて失はるる營養價を補足し、何を以て其の味を調製す可きか、且つ其の分量如何等は、大に研究を要す可き重要なものなりとす。

現時普通に用ひらるる調味料は糖類なり。其の種類多くして、ソクスレツト滋養糖、レフルンド滋養麥芽糖、ケルレルマルツ汁、改良リービツヒ汁、水飴等用ひらる。蔗糖及び乳糖の如きは用ひざるを可とす。嘗て、カメレル及びホイブネル兩氏が、乳兒は其の體重一キログラムに

調味料の種類

就き、大約一〇〇カロリーの營養價を攝取せざる可らずと稱へし以來、學者及び世人は、何れも牛乳の稀釋に依り、失はれたる營養價を、他の營養素の添加に依りて補充せんとすることにのみ腐心し、毫も他を顧みざるの狀態なりき。

吾人は、過度に糖類の補充の害あると同時に、又これを過少に用ふる場合の有害にして、往々胃腸を損傷することあるを見て、其の程度の如何に迷ひたることありき。

平井博士は、茲に見る處あり、營養液の濃度は、宜しく血液の濃度と同一のもの、換言すれば營養液は血液と同一の滲透壓を有するものならざる可らざるを主張し、實驗の結果は其の眞なることを證せり。

人乳は勿論、牛乳にありても、其の純粹なるものは、血液の濃度と全然同一なり。これ大に意味あることなりとす。

世人の日常遭遇するが如く、鹽分又は糖分の甚しく濃厚なるものを食せし後に於ては、大に煩渴を覺え、多量の湯茶を飲用し、以てこれを調節す



るにあらすんば、遂に堪え難きに至る可し。  
抑々吾人體内の組織間液、殊に血液は常に一定不變の滲透壓を有し、些の變動もこれを許さず。若し、少しにてもこれが變動を來す時は、直に鋭敏の反應を顯はし、或は煩渴となり、或は不快の感となり、これを慰せずんば、到底安靜なること能はず。大人にして猶且然り、況んや乳兒に於てをや。

液の滲透壓に、甚しき影響を與ふるものは、食鹽、又は糖類の如き分子の小なる結晶體にして、蛋白質の如き分子の大なる無定形質のものは、其の影響少なし。

滲透壓の甚だしきもの  
分子粗大なる無定形質

次に掲ぐるものは右の理由より豫定したる血液と、略同壓の營養液なり。此等の液の何れを以て、牛乳を稀釋するも其の結果は血液と略同壓のものを得らる。

- 一五布仙「ミルクフード」液、
- 一四布仙水飴液、
- 一三布仙「コンデンスミルク」液、
- 一二布仙「ソックスレット」營養糖液、

- 一一布仙「メリンス」フード液、
- 一〇布仙「蔗糖」液、
- 九布仙「乳糖」液、
- 七布仙「葡萄糖」液、
- 六布仙「蜂蜜」液、
- $\frac{2}{3}$ ケル「レル」マルツ汁、
- $\frac{2}{3}$ 改良「リービツ」汁、
- $\frac{2}{3}$ 「ヒギヤマ」液、
- 九箇月兒用「インフアンチナ」液、

麥湯、葛湯、薄粥等は、鹽、又は砂糖等の少量を加へざれば、滲透壓僅少に過ぐ。

今牛乳を稀釋するに際し、牛乳自己は、血液と同壓なるを以て顧慮するを要せず。只稀釋に用ふ可き液を、上記の濃度を標準として作れば、即ち營養液全部の滲透壓は、血液と略同壓となるを以て可なり。而して得たる稀釋牛乳は、上記の標準よりも稍稀薄なるは害なしと雖、これより濃厚に失する時は害あり。特に、夏季炎熱の候は、稍稀薄なるものを與ふるを可

とす。

右の内、水飴は殊に用ふるに便なり。即ち其の價の廉にして、其の質の良好なる、且つ都會と田舎とを問はず、直に得易き等の諸點を以て、我邦に於ける理想的調味料なりと稱するを得可し。

湯、若くは薄粥、又は二布仙位の稀薄なる葛湯に、一一布仙の割合に水飴を加へしものを以て、牛乳を適當に稀釋する時は、血液に比し、僅に低壓の營養液を得らる可し。乳糖、又は蔗糖は、醱酵し易きも、麥芽糖は醱酵し難く、極めて良好なり。

左に記せるは、薄粥の製法なり。

五勺の米に、六合の水を加へ、三十分煮沸し、上澄三合を採取したるものを、普通の薄粥とす。

尙左に、普通用ひらるる營養品の燃燒價を擧ぐれば、

- 人乳壹リットルは……………七〇〇「カロリー」
- 牛乳一リットルは……………七〇〇「カロリー」
- 一三布仙煉乳一リットルは……………四三〇「カロリー」

理想的調味料

營養品燃燒價

- 一〇布仙糖液一リットルは……………四〇〇「カロリー」
- 一四布仙水飴液一リットルは……………五〇〇「カロリー」
- 一一布仙水飴液一リットルは……………四〇〇「カロリー」
- ケルレル「マルツ」汁一リットルは……………八〇〇「カロリー」
- 一〇布仙ソキスレット滋養糖一リットルは……………四〇〇「カロリー」
- 薄粥一リットルは……………一二〇「カロリー」

ホイブネルの説に依れば、生後三箇月間は、平均體重「キログラム」に就き、一日一〇〇「カロリー」を要し、四箇月より六箇月迄は、一〇〇「カロリー」、七箇月より九箇月迄は九〇「カロリー」を要すと云ふ。

右の内、其の七七布仙は、身體の表面より放散して逃れ去る所の溫熱を補充するに用ひられ、一〇布仙は、尿及び大便に排出し、一八布仙は、體重増加に充てらるるものなり。

如斯、身體表面より放散する熱量は、攝取する所の營養品の「カロリー」に、最も大なる係を有するものなるを以て、乳兒の體表面積を基礎として、其の兒の要する「カロリー」を概算する必要あり。大谷の我邦小兒に就き調査せる處に依れば、體表面積は、

$5.99 \sqrt{\text{體重} \times \text{身長}}$

なる算式を以て算出する事を得可く、又體重「キログラム」に要する「カロリー」需要

ホイブネル氏の説

沈く應用す  
べま哺乳量

なる式を以て概算する事を得可し。然れども、天然營養兒の哺乳量が、各兒一様ならざるが如く、不自然營養兒の乳量も、各兒決して一定のものにあらず。故に、單純にこれを算出するは、決して正確のもの云ふ可らず。宜しく各兒の健康状態及び乳汁に對する消化力を斟酌して加減す可し。故に、實際に應用せらる可き哺乳量は、左の如き概數を記憶するを以て、便利にして且つ實際的なりとす。

1000 X 身長(厘米) 體重(キログ)	一箇月兒は	二箇月兒は	三箇月兒は	四箇月兒は	五箇月兒は	六箇月兒は	七箇月兒は
	一〇グラム	一二グラム	一三〇グラム	一四〇グラム	一五〇グラム	一六〇グラム	一七〇グラム

一回量を右の如く簡單なる數として記憶し、以て夏日の量とす。冬季は消化器の抵抗力増進するを以て、これに一割乃至二割を増量して用ふ可し。授乳の度數は、一日五回乃至六回を良とす。例せば三箇月兒は、夏季に於

煉乳

煉乳の成分

て一日一三〇グラム、冬季に於て一五〇グラムを與ふるが如し。普通の煉乳は、糖分甚多くして、營養品として極めて不完全なるものなれども、止むなき場合には用ふるを得可し。其の成分、大略左の如し。

水分	蛋白質	脂肪	糖類	鹽類
三・三三布仙	八・三九布仙	九・四六布仙	四・八九布仙	一・八八布仙

にして、其の一〇〇グラムは、約三三〇カロリを有し、即ち一罐、約五〇〇グラムは、一六五〇カロリの燃焼價を有す。而して、煉乳は重量三一三布仙のもの、血液と略同壓なるを以て、容積に於て十三倍より濃厚のものを用ふ可らず。又十五倍より稀薄なるものを用ふるを要せず。其の使用量は、大略次の如きものなる可し。

一箇月兒は……………一罐を四日に用ふ。

牛乳に加入  
する新陳代  
謝の及ぼす  
影響

二三箇月児は………一罐を三日に用ふ。  
 四乃至七箇月児は………一罐を約二日半に用ふ。  
 其の他、乳児の營養品、又は病児の營養品として用ひらるるものに、脱脂乳、「バタ」乳、ビーデルト乳、脂混和乳、ゲルトネル脂肪乳、バツクハウス牛乳、ヴェルトメル母乳、レフルンド「ベプトン」化乳等あるも、實用に適せず。

牛乳に加入す可き含水炭素の、新陳代謝に及ぼす影響は、甚重要なるものにして、第一に體重の増加に大なる關係を有し、蛋白質脂肪等を如何に増加するも、適當の含水炭素を加入する事なくんば、體重の増加は望む可くもあらず。第二に含水炭素は、「グリコゲン」に化する際、二三倍の水分子と結合するを以て、体内に水分を停滞せしむる作用あり。第三に、體溫調節に必要にして、含水炭素に乏しき食餌を與ふる時は、體溫の下降を來す。第四に、蛋白質を体内に蓄積せしむる作用あり。第五に、多く「エネルギー」の目的に使用せらる。第六に、脂肪の新陳代謝を完全ならしむ。第七に、腸内

乳児に用ふる糖類

單糖類	葡糖	果糖	乳糖	麥芽糖	蔗糖	澱粉	糊精	纖維
複糖類	葡糖	糖	糖	糖	糖	粉	精	維
多糖類	糖	糖	糖	糖	糖	粉	精	維

に於て醗酵し、大便の硬度を柔軟ならしむ。而して、普通吾人が乳児に使用せる糖類は、これを大別して左の三種とす。

就中、主として用ひらるるものは、麥芽糖、蔗糖、及び乳糖なり。澱粉は、多く穀粉狀に於て使用せらる。

麥芽糖製劑の内、最も多く使用せらるるものは、水飴及びソキスレット

同化限

滋養糖、及びレフルンド滋養麥芽糖にして、其の他リービッツヒマルツ汁も亦用ひらる。これ麥芽糖は同化限高くして、醗酵すること少なき故なり。乳糖は同化限低く、吸収遅く、容易に下痢を起す恐あるを以て、近時用ひらるゝこと益々少なし。蔗糖も亦醗酵すること容易なるを以て、乳児に用ひざるを可とす。又單に甘味を附するを目的とする場合には、「サツカリン」の如きを用ふるを安全とす。

第一含水炭素

含水炭素中、可溶性のものを第一含水炭素と稱し、不可溶性のものを第二含水炭素と稱す。

第二含水炭素

第二含水炭素は、主として穀粉として使用せらる。時として穀粒として使用することあり。これ等は凡て生後三箇月以後の乳児に用ひらるゝものにして、これ普通の養育法に依るも、體重の増加を來さざるが如き場合に用ひらるゝ法なり。これ等を用ふる場合は、凡て適當に鹽類の混和を要す。穀粉製劑中、最も多く使用せらるゝものは、乳粉、葛湯、山藕湯、「ミルクフード」メリンスフード「薄粥」等なり。

### 第四章 混合養育法

混合養育法

母乳の不足する時は、止むなく他の養育品を混用するに至る。普通用ひらるゝるものは、牛乳、又は他の穀粉製劑なり。これを行ふに二様あり。一つは人乳と、他の養育品とを交互に與ふるもの、他は同時に與ふる法なり。母一回の乳汁分泌量が、兒一回の哺乳量に充たざる時は、後者を撰ぶ可きも、普通は前者を用ふ。此の時注意す可きは、乳瓶より哺乳せしむる時は、吸乳容易なるを以て、漸次乳房に附くを嫌ふに至るゆゑに、乳瓶の護謨管に壓を加へ、又は乳嘴の孔を小になして乳汁流出を困難ならしむることなり。否らざれば、混合養育は、日ならずして純人工養育に移行す可し。

### 新撰 助産婦學上卷終

明治三十九年四月四日發行  
 明治四十一年五月十一日增訂再版發行  
 明治四十四年七月廿八日增訂再版發行  
 明治四十四年七月廿八日增訂再版發行  
 明治三十四年七月廿五日增訂再版發行  
 明治三十四年七月廿五日增訂再版發行  
 明治三十四年七月廿五日增訂再版發行  
 大正四年十月二十七日新撰第十三版發行  
 大正四年十月二十七日新撰第十三版發行  
 大正四年十月二十七日新撰第十三版發行

新撰助産婦學上卷  
 正價金貳圓參拾錢



緒方正清

丸善株式會社

右代表者 小柳津要人

專務取締役 神谷岩次郎

印刷者 東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京市日本橋區兜町二番地 東京印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區通三丁目  
 丸善株式會社  
 大正市東區博勞町四丁目  
 丸善株式會社  
 京都市三條通鉄屋町西  
 丸善株式會社  
 福岡市博多上四町  
 丸善株式會社

醫學博士 緒方正清氏 著

近刊豫告

# 新助産婦學

下卷 菊判洋裝 印刷中

獨逸ワルテル教授原著

醫學博士 緒方正清氏 梅山英俊氏 共譯

# 産褥婦と初生兒の看護法

菊判洋裝 紙數二百八十餘頁 全一冊 正價金壹圓參拾錢 郵稅金拾貳錢

婦人の生涯の危機は産後の數週間の攝養にして人間の健康の基礎は生後一年間の哺育に由て定まる、産婦と初生兒の看護は最も嚴格に施さるべきで科學的ならざるべからず、中間此種の類書汗牛充棟すれども緒方、梅山兩先生の共譯に成りたるワルテルの所著が權威的にして専門看護婦の爲めにも將た素人の爲めにも、最も平明にして且最も實際的且斷る緊要なる事項を網羅したるは獨逸醫學會の激稱噴々とする處助産婦看護婦は本より一般家庭に亦本書を備へて幸福に沐すべき也

目次概要 第一編 第一章 産婦の看護 第二章 産褥婦の看護 第三章 乳房の構造 第四章 産婦の看護 第五章 産褥中の母體の變化 第六章 初生兒の發育 第七章 一般の患者看護 第八章 消毒法 第九章 患者の看護 第十章 患者の看護 第十一章 産褥中の要點 第十二章 産褥中の看護 第十三章 産褥中の看護 第十四章 産褥中の看護 第十五章 産褥中の看護 第十六章 産褥中の看護 第十七章 産褥中の看護 第十八章 産褥中の看護 第十九章 産褥中の看護 第二十章 産褥中の看護

獨逸醫學博士 ゼルハイム氏原著 醫學博士 緒方正清氏譯

# 産科婦人科診斷學

菊判洋裝 紙數四百五十餘頁 全一冊 正價金貳圓參拾錢 郵稅金拾貳錢

堂々たる我邦の醫學界に産科婦人科診斷學に關する書なし、之れ有るは實に本書に始まる本書は獨逸醫學界の泰斗セルハイム博士の名著なり博士嘗て日本に遊び譯者緒方博士と友とし善し、而して先年緒方博士萬國醫學會に參列の途次、セルハイム博士をピツゲン大學に訪ふやセルハイム博士は當時執筆中なる本書の脱稿を待つて之を日本に公にせんことを托せられ、緒方博士の快諾を得て茲に此譯書を見るに至れり、本書は學術を主として實地的應用と學生の演習に至大の教導裨益を與ふるは目次に依りて知らるべし

目次概要 第一章 産科婦人科診斷に於ける實習と學習 第二章 産科婦人科診斷に於ける手指の演習 第三章 手の天賦的資性 第四章 産科婦人科實習としての手の修養 第五章 患婦待遇法 第六章 既往病歴 第七章 産科婦人科診斷に於ける準備及び補助法 第八章 骨部骨盤の検査法 第九章 妊娠の診斷 第十章 妊娠の診斷 第十一章 産婦の診斷 第十二章 産褥の状態の徴候 第十三章 産科婦人科診斷の行程 第十四章 子宮腔の診斷 第十五章 試驗的截除法及診斷目的に於ける爾他手術的技法 第十六章 直腸検査法及び直腸經由診斷法 第十七章 泌尿器検査法

醫學博士 緒方正清氏 著

# 婦人科手術學

菊判洋裝 前 紙數七百七十餘頁 全二冊 編 正價金貳圓五拾錢 郵稅金拾八錢 後 紙數七百餘頁 編 正價金貳圓八拾錢 郵稅金拾八錢

本書第一版は發行以來幾歳月を経ずして望外の反響を婦人科學海に與へ絶版せり、茲に於て弊社先生に乞ひ先生更に自家の實驗説を基礎として、現今歐洲婦人科の泰斗として其學の深遠其識の該博世人の信奉せるヘーカルルテンバツハ著婦人科手術學の新版に則り婦人科診斷法、藥物的治療法及外科的技術等最新術式は悉く網羅し遺す所なく實に錦上添花を添ふるものと云ふべし、加ふるに先生の立案正確文辭明晰圖畫精巧なる等其價值に至りては吾人の喋々を待たざるなり請ふ世の刀圭家諸士空しく改版の名のみに非らざる第二版の眞價を知り賜へ

醫學博士 緒方正清氏著

### 婦人の家庭衛生

菊判假裝 紙數四百餘頁  
全一冊 正價金壹圓  
郵税金拾貳錢

近時我邦に於て、家庭衛生の語は盛んに唱へらるれども其聲のみ徒らに大にして、其實際に於ては功を擧ぐる事妙き所以のものは蓋し適當なる良書に乏しきこと其一大原因なるべし。本書は緒方正清博士が一般の婦人をして衛生的知識の發展に努め之が改善を促すの目的を以て公にせられたるものなり、結婚の注意、配偶の選擇、血族結婚の利害、色慾の利害、遺傳病の努め、花柳病の傳染、家庭の融和、妊婦產婦及び褥婦の攝生法、育児の方法等婦人の家庭に對する必要の事項を學理に基きて通俗的に説明せられたれば、圓滿なる家庭を作り、健全なる子孫を擧げんと欲する人々は本書を手にする事を忘れ給ふな。

醫學博士 土肥慶藏氏序 醫學博士 緒方正清氏共編  
醫學博士 田代義德氏序 在醫科大學 緒方英俊氏編

### 硬性放射線學

美裝 堅釘 正價金貳圓八拾錢  
紙數四百五十餘頁 郵税金拾八錢  
背像精畫挿入

我醫界を震撼せし放射線學は、駭々乎として今や治療界を壓倒するの概あり。殊に硬性放射線學は其の創見極めて嶄新に屬するを以て夫が著書鮮く之に關する材料を蒐集せる文獻なきは吾人の遺憾とする所なり。緒方正清博士此に見る所あり。歐洲の成書に照し自家の實驗に基き本書を著し、エツキス光線、ラジウム、メソリウム等の生物化學的論理に基き醫學上に於ける理論と實際とに互り、最も精細に而も明確に説述し、且三者併用の方法を論ぜり、内科、外科、産科、婦人科、耳咽喉科、眼科、齒科等に於ける治療法の學理方法は一目の下に悟せらるべく、歐洲にても未だ見ざる所の珍書なり。

醫學博士 男爵石黒忠惠氏序  
醫學博士 谷本富氏序  
醫學博士 吳秀三氏序  
醫學博士 富士川游氏序

醫學博士 緒方正清氏著

### 日本婦人科史

和裝美册上下二卷挿入  
繪畫數百個挿入  
定價金貳圓八拾五錢

緒方正清博士、二十餘年前既に日本産科史の著あり、今や其姉妹編たる本書を公にせらる、本書筆を太古に起し、婚娶、産屋、生兒命名、禁壓、産儀又は竹刀斷臍の項を詳述し、或は神事と備佛二教との産事習俗、鎮懐石、支那醫方傳來等に及ぼし、中古に至りては、律令の制、女醫博士、捨兒と救兒院、悲田院と産事、禁忌祈禱、鎖帶、産婆と産殿、女科醫の各項を精記し、近古にては、産婦人科の發達と共に儀式俗習を陳べ、近世に互りて中條、賀川、蛭田諸流と産科器具及び産科書と翻譯書とを列擧し、近代史には産婦人科に於ける諸種の發達等を叙して擧筆せり、此の間、各派の沿革、諸家の記傳業蹟は、該博なる考證と、精細なる記述とに努め悉く傍訓を施し、秘録古文書、木版畫、コロマイプ等數百個を添へて、錦上添花を加ふるのとを推稱するに憚らざるなり。

醫學博士 荒木寅三郎氏序 醫學博士 緒方正清氏著  
醫學博士 富士川游氏記傳

### 初生兒發啼術

和紙和裝圖入雅釘美册  
正價金壹圓貳拾五錢  
郵税金 六錢

初生兒を假死より救ふは、産科醫、并に助産婦の一大任務にして、古來その方法の案出せられたるもの少なからず、就中有名なにして汎く行はるるものをシユルチエの振搖術とす、然も該術は、未だ完全無缺のものにあらず、著者多年該術を研究して大に得る所あり、今や獨創の方式を完成し、新に初生兒發啼術と名づけて之を公にせり、本書に於ては、先づ該術の歴史より假死の意義、由來、顔度、原因、病理、症候、診斷、豫後、療法、看護法等を東西の文獻に温れ、平易簡潔に正しく其論理及方法を叙述し、又内外諸家の批評をも論載せらる、實に初生兒發啼術に於ける本邦鼻祖の博士が熱誠なる斯者は、爾今斯界を裨益するもの多大なるべきを信するなり。



醫學博士 緒方正清氏補修  
醫學士 水口耕治氏編次

# 婦人科レンチエン學

レンチエン放射線の發明以來長足の進歩をなし、診斷的應用並に表層疾患に成功し、更に深部療法の効果卓絶なるの今日深部治療に於ては實に婦人科を以て嚆矢となす、然るに未だ斯學の書なく著者此處に慨し先鞭を著けたり、其内容を第一論理(レ)ンチエン放射線の原理及電氣の應用、第二裝置第三診斷法第四放射の生理及病理第五深部療法の原則第六婦人科的應用第七産科的應用第八副作用の八篇に分ち婦人科學上深部の療法發達は勿論應用に於て實地的に懇切丁寧に詳説細叙し、毫も餘温なからしむ、想ふに斯書獨り婦人科學上斯學の急先鋒たるのみならず、一般レンチエン學を修めんとする士の良師友として正に白眉たるべし。

洋裝美製 圖解多數  
定價金 貳圓  
郵税金 拾貳錢

東北帝國大學 農學博士 大島金太郎氏序  
東北帝國大學 農學士 田所哲太郎氏編

# 酵素化學

造化が吾人に賦與したる燃料不用の機關あり。何ぞや？此れ實に酵素に外ならず、酵素は近代生物化學界が生産せし新生兒にして吾人がこの偉器を利用して或は澱粉の糖化を行ひ、或は酒類を醸造し或は之を人體に用ひて消化の靈劑たらしむる等其の工業及農業上の應用化學界其他醫學界に於ける應用を數へ來たらば、殆んど枚舉に遑あらざるべし。酵素化學の研究は眞に農業界、應用化學界、醸造界、醫學界、藥學界の開展なり進歩なり、著者が歐米の専門書を拾く涉獵參照して縱横細說せし本書は斯學に志す士の隨一の津梁として普く江湖に推舉すべきもの也。

菊判洋裝 全一冊

紙數四百餘頁  
圖版數數一種  
ヨロタイ版一種  
正價金 貳圓  
郵税金 拾八錢

獨逸樞密醫官婦人科教授ドクトル  
日本緒方婦人科病院長 醫學博士 緒方正清氏譯述

# 社會的色慾論

此書は最近婦人科學の泰斗たるヘーガル先生が多年の經驗に徴し色慾の原理が精密なる統計に基き社會に於ける色情の關係を生理上及び哲學上より論究し、ヘーガル先生が多年の經驗に徴し色慾の原理が精密なる統計に基き社會に於ける色情の關係を淫慾充進症、花柳病、梅毒、房事、因する社會的關係、婚嫁者、獨身者に於ける壽命の關係、房事、自殺者、狂者、色慾に於ける國家の侵襲、房事、因する社會的關係、婚嫁者、獨身者に於ける壽命の關係、房事、自殺者、狂者、政治、ヒッソフ氏の學說、房事、因する社會的關係、婚嫁者、獨身者に於ける壽命の關係、房事、自殺者、狂者、議論、新精緻にして而かも文章平易なれば醫學者は勿論社會爲政者より一般士女に至るまで苟も生を此世に享けたるもの必らず一讀すべき寶典なり。

菊判假裝 全一冊

紙數二百七十餘頁  
正價金 壹圓  
郵税金 八錢

緒方病院看護婦養成所長ドクトル  
緒方病院産婆看護婦養成所講師 岡垣松太郎氏校閱

# 最新看護學

本書は從來看護婦養成上適當なる教科用書のなかりし不便を補ひ、又既に看護婦と成れる者の實地に於ける參考書とし、又將來看護婦たらんとする者の居ながらにして修學し得らるべき受驗用とし、又一般看護及び衛生を重んぜらるる家庭用書として今回新たに世に出たるものなり。而して内容は詳細明確にして且總振假名付となし、又圖畫を多く加へて學說の參考に供し、以てその知識と實用とを充し得べく、以上の要求に對して何れもその適當なる實質を具備せり。近來に於ける最も信用ある好著として敢て一本を其座右に備へられん事を切に薦む。

菊判洋裝 全一冊

紙數五百餘頁  
圖版二百五十餘頁  
正價金 壹圓八拾錢  
郵税金 拾貳錢

授教學大國帝都京

著氏郎太文木鈴士博學醫

### 顯微鏡及鏡查術式

菊判洋裝 紙數四百七十頁  
全一冊 正價金貳圓貳拾五錢  
郵税金拾八錢

#### 要摘次目

第一編 顯微鏡 其種類及主要成分○購入上の選擇○雙眼用顯微鏡○照準法○分極及分光裝置○顯微鏡使用心得○顯微鏡的計測法○描寫法○顯微鏡寫真  
第二編 鏡查術式 器械器具及實驗室○研究用材料○屠殺法及解剖○生活中若くは生餘の動物及組織の檢査○固定及硬化法○石灰奪除法○浸漬及包埋法○刪載法○琢磨法○分離法○染色法○色素顆粒奪除法○金屬令孕法○注入法○標包法○持久標本貯藏法○象形複成法○附圖

### 解剖學名彙

袖珍裝 紙數二百餘頁  
全一冊 正價金七拾五錢  
郵税金六錢

我邦の唯一なる本書は曩きに獨逸解剖學會の第九回會合に於て可決せる萬國の術語とも稱すべき羅甸名を基礎として一般的名語、骨學、靱帶學、筋學、內臟學、血管學、神經學、識官器及總被等に大別して更に之を數十百項目に細分し廣く先人の譯語を參照考定して其足らざるものは博士自ら増補選定せられたり。

官劑藥等一軍陸

著編氏作嘉摸相

### 新藥物名彙

菊判洋裝 紙數五百五十餘頁  
全一冊 正價金貳圓五拾錢  
郵税金拾八錢

本書は和漢洋及最新の洋藥五千餘種に就ては順により一々其の藥名、別名、成分、應用、性狀、記號の六項に分ち原語並に譯語を以て各々其の主要の點を載録せるが故に一目の容易に各種藥品の成分効用性狀を知得するを得。  
一、藥物名彙自一至四八八頁○附錄一、日本藥局法沿革略記○二、第三改正日本藥局法緒言△同第一表(常備藥)同第二表(毒藥)△同第三表(劇藥)△同第四表(毒劇藥極量)△第五表重要なる原素の記號及原子量)  
○三、法定藥品名慣用藥品對照表○四、毒劇藥品目(藥局法以外)○五、萬國藥局法收載の劑名○六、最新治療藥應用編○索引。

### 訂增食物彙纂

菊判洋裝 紙數四百五十餘頁  
全一冊 正價金壹圓八拾錢  
郵税金拾八錢

和漢洋の飲食物を廣く蒐集して、其分類、傳來、產地、性質及び製法等を化學上及び衛生學上より記述せり、増訂第三版は前版に比し全部各章に渡りて嚴密なる校訂を施し更に各項に新研究を加へ紙數を増加する四十有餘に及びたれば今や本書は食物界の最も包括的なるエンサイクロペヂアとなれり。  
總論 第一章酒類○第二章水類○第三章亞爾加魯乙度飲料○第四章乳汁及同製品類○第五章果實及同製品類○第六章禾穀類○第七章豆菽類○第八章根菜類○第九章葉菜類○第十章蘆果類○第十一章海藻類○第十二章菌及地衣類○第十三章香辛類○第十四章甘味類○第十五章救荒植物類○第十六章製造食品類○第十七章肉類○第十八章卵類○第十九章脂肪及食油類○第二十章越獲斯類○第二十一章罐詰類○第二十二章喫烟類○附錄一、臺灣支那料理・二、有毒性植物及魚類。

醫學博士 岡道治 氏著

### 人體畸形矯正學

著者は京都醫科大學に於て、斯科を擔當せられて以來、四年間に於て已に六千に近き畸形患者を治療せられしに徴しても、其學殖の深く實驗に熟せらるゝを知るに足る、本書の出づる亦以て我邦醫術の進歩を飾る一大光彩と謂ふべし。

### 骨及關節ノ結核

恐るべき結核病の一なる骨結核の病理解剖、及び臨床的療法に就て、最新の學理を緯とし、著者の實驗を經とし、全篇を病理解剖、徵候、診斷、豫後、療法に分ちて、簡明的確なる説明を試めり。

### 先天性股關節脫臼及び其跛行療法

先天性股關節脫臼の病理解剖的研究に就て、診斷、整腹法及び整腹固定後の療法を十七種の網目版を挿入して説明せるもの、是等の不具者及び其父兄に取りて、實に一大福音たるべし。

菊判洋裝 紙數三百餘頁  
全一冊 正價金參圓  
郵税金拾貳錢

四六判洋裝 紙數百十餘頁  
全一冊 正價金壹圓  
郵税金八錢

四六判洋裝 紙數六十餘頁  
全一冊 正價金壹圓  
郵税金八錢

小兒科專門 長濱宗信氏著

### 增訂七版 小兒養育の心得

大阪回生病院 醫學博士 柳瀬實次郎氏講述

### 小兒救急母の手引

鈴木文雄氏著

### 婦人病と水治法

醫學博士 緒方正清氏主幹 (日本唯一之產婆雜誌)

### 助産之葉

本誌は本邦唯一の助産婦學雜誌にして日本及び歐洲に於ける最近助産婦術の現況は勿論諸大家の名説各國助産婦社會の出來事は細大報導して漏すなし實に産婆及び産科醫諸君の好師友たり。  
助産婦學會員には毎號助産の葉を配布す。入會希望の方は左記學會へ申込まるべし。會費は一箇年前金壹圓五拾錢

菊判洋裝 紙數三百餘頁  
全一冊 正價金壹圓  
郵税金拾貳錢

菊判洋裝 紙數八十餘頁  
全一冊 正價金九拾錢  
郵税金八錢

菊判假裝 紙數百餘頁  
全一冊 正價金五拾錢  
郵税金六錢

每月一回發兌  
每號八十餘頁

大阪市東區今橋三丁目緒方邸内 助産婦學會

K 299

### 緒方婦人科紀要

韓國は併せられたり、我日本帝國は大陸的大日本帝國となれり、島帝國的國民は茲に大陸的大國民となつて尙ほ富國強兵の實を擧げざる可からざる秋となれり。學術、技藝、軍事、教育、商工、農事凡そ國民の大發展を爲すべきもの、皆是れ富國強兵に俟たざるべからずして富國強兵の要素は實に國民元氣の消長如何に關係し國民元氣の消長如何は國民の健否の如何に由る、我婦人科紀要は夙に見るあり、明治三十五年中央婦人科學會雜誌を刷刊し、次で明治四十年富山縣奇病の研究を遂げたるを動機として、緒方婦人科紀要と改題し、茲に之を内外に頒ち、聊之に依りて母體の健康を保持し、之に由りて生すべき國民の健康を期待したり、爾來九年益々購讀者の數相増し茲に斯く國運の大發展に遭遇し、我國諸博士外國各大學の諸大家シュロープ、ヘーガル、ウエ、ア、フロイント、エル、フロイント、ハ、フロイント、テメスバツ、ワルトハルド、ストラースマン、レオホルド、ウエルトハイム、セルハイム、フロンメ、マイエル、シユルチエ、シヤウタ、オーピツツ、ツワイフェル、ホーフマイエル、フアイト、ヂユールセン、ウインテル、ブリウス、ドアイヤン、セーゴン、ホツゲ、ピナール、カール、ヘーガ、ル、マルチン、ラング、ウ、其他諸博士を加へ和文と原文と並載して以て愈々世界的施設を完ふせり、其内容の豊富と外觀の改善とは蓋し錦上華を添へたるを自負せると共に我醫學社會雜誌中に先着を贏得したるを斷言して懽らす、之を購讀して將來を期すべきこと固より國民義務の一端なるが如し。

有志の士幸に本誌の微衷を察せられて會員として續々入會購讀の榮を給はらん事を乞ふ。

主 幹 大阪市東區今橋三丁目 緒方正清  
發 行 所 東京 大阪 丸善株式會社  
京都 福岡

56  
47

終

